

国立国語研究所学術情報リポジトリ

基礎篇第二十七課 にもつを もって もらいまし
た：やり・もらいの表現 2

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002803

基礎篇第二十七課

にもつを もって
もらいました

——やり・もらいの表現 2——

国 立 国 語 研 究 所

前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課およそ5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするもので、全30課を昭和58年度までに完成した。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにすることを願っている。

この第二十七課「にもつを もって もらいました」の解説は、日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室が企画・編集し、執筆にあたったものは、次のとおりである。

本文執筆 川瀬生郎（元日本語教育センター日本語教育指導普及部長
・東京大学教授）

資料1., 2. 日向茂男（元日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室・東京学芸大学助教授）

昭和62年12月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

目 次

1. はじめに	1
2. この映画の目的・内容・構成	2
2.1. 目的	2
2.2. 内容・構成——場面を中心として	3
2.2.1. 言語場面, 言語表現についての扱い	3
2.2.2. 言語場面, 言語表現についての解説	4
(1) 人間関係	5
(2) 場面の構成	5
(3) 各場面ごとの言語表現等について	6
3. この映画の学習項目の整理	23
3.1. やり・もらいの表現(2)——補助動詞としての用法	23
3.1.1. 話者の視点と授受者	23
3.1.2. 文構造について	28
3.1.3. 移動の方向と話し手の意識	29
3.1.4. 授受行為の内容について	31
3.1.5. 待遇度	32
3.2. あいさつ等の表現(2)	33
3.2.1. 人と再会した時	33
3.2.2. 相手の健康をたずねる時	34
3.2.3. 感謝の意を表す時	35
3.2.4. 帰宅した時	36
3.2.5. 別れの時	37
3.2.6. あいさつ語の機能	38
3.3. 男ことばの問題(2)	41
4. 練習問題	44
4.1. 導入と練習の方法	44
4.2. 「～てあげる」「～てもらう」「～てくれる」の基本的練習問題	45
4.3. 映画の場面を使つての練習例	46
5. 参考文献	48
資料1. 使用語彙一覧	53
資料2. シナリオ全文	72

1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩の日本語学習期における視聴覚教材として企画・制作されたもので、この映画「にもつを もって もらいました」は、その第二十七課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の作成等に当たったものは、次のとおりである。

昭和57年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

石田 敏子	国際基督教大学講師
木村 宗男	日本語教育学会専務理事
工藤 浩	国立国語研究所言語体系研究部研究員
窪田 富男	東京外国語大学教授
斎藤 修一	慶応義塾大学国際センター教授
佐久間勝彦	東京外国語大学講師
杉戸 清樹	国立国語研究所言語行動研究部研究員

国立国語研究所日本語教育センター関係者（肩書きは当時のもの）

野元 菊雄	日本語教育センター長（前期）
南 不二男	〃（後期）
川瀬 生郎	日本語教育センター日本語教育指導普及部長
日向 茂男	〃 日本語教育教材開発室長
清田 潤	〃 〃 技官
中道真木男	〃 〃 研究員

この映画「にもつを もって もらいました」は、日向茂男、清田潤の原案に協議委員会で検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は、日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つま

り脚本の執筆には同社の前田直明氏があたり、また同氏はこの映画の演出も担当した。ただし演出の際の言語上の問題については、協議会委員及び日本語教育センター関係者の意見が加えられている。

本解説書は、日本語教育教材開発室が全体企画・編集を行い、執筆には川瀬生郎元指導普及部長があたった。また資料1.、資料2.は、日向茂男元教材開発室長が担当した。全体の企画、また執筆にあたっては、この映画の企画・制作段階での意図が十分生きるよう努めた。

現在、この映画は、より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理係
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお、この映画は、そのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

2. この映画の目的・内容・構成

2.1. 目的

この映画「にもつを もって もらいました ―やり・もらいの表現2―」では、他者のために行う動作の授受に関する基本的な表現を、具体的な人間関係や場面の中で提示し、「やる／もらう／くれる」などの補助動詞として

の用法を理解させることを目的としている。物の授受に関する本動詞としての用法は、第26課「このきつぷを あげます ―やり・もらいの表現1―」で解説したので参照されたい。

動作の授受を意味する基本的な形式には、動詞の連用形に「～てやる」「～てあげる」「～てさしだげる」、「～てもらう」「～ていただく」、「～てくれる」「～てくださる」をつける形がある。この映画では、これら3類7種の表現と用法を扱っている。

授受表現には、与え手と受け手の人間関係が関与する。また、話し手と聞き手の立場によっても種々の異なった表現が用いられる。待遇表現に関しては、第29課「よく いらっしゃいました」、第30課「せんせいを おたずねします」で詳しく扱うが、この映画では授受行為に関係した待遇の側面も扱い、待遇表現の初歩的な理解を図ることも目的としている。このほかに、この映画で扱った学習項目には、場面に応じたあいさつ表現、話し言葉に見られる男女差などがある。いずれも、第26課で扱った学習項目と同じである。

2.2. 内容・構成——場面を中心として

2.2.1. 言語場面、言語表現についての扱い

この映画での場面や言語表現については、以下のとおり扱うことにする。

1. 映画の構成にしたがって場面を分ける時には、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ……のようにし、それをさらに短いシーンに分ける時には、Ⅰ―1、Ⅰ―2、Ⅰ―3……のようにする。
2. 言語表現については、文単位で①、②、③……のように通し番号をつける。類似文や変形文を引用する時には、①'、②'、③'……のようにする。変形引用が二つ以上ある時には、'、''……の順で'を重ねていく。
3. この映画の中に現れていない文や語句を例示する時には、〔 〕付きの番号をつけ、それに関連した引用文や引用語句には、2.の場合と同様に'印をつける。一群の文や語句を例示する時にも、出現順に通し番号

をつける。

本解説書での言語表現の扱いについては、文単位の認定に多少問題のあるところもみられるが、ここでは、積極的には、その問題に触れない。

なお、①、②、③……の文番号は、使用語彙一覧で引用される文や、シナリオ全文につけられた番号と共通である。

2.2.2. 言語場面、言語表現についての解説

この映画の主題は、第26課にひきつづき「やり・もらいの表現」である。日本語の授受表現は、表現形式・用法の多様さから、外国人学習者にとって極めて困難な学習項目の一つである。特に、補助動詞としての用法を場面や文脈に合わせて正しく使い分けることは外国人学習者が最も苦手とするところである。

この解説では、授受に関する補助動詞を用いた表現が、どのような場面で、どのように使われるかをまず見ていく。

この映画の舞台は雪国である。主な映像場面は、雪国の駅、ホーム、駅前、雪道を走る車、郊外の家、住居の内外、餅つき、雪囲いの作業などである。映画は、同じ列車で帰省した若い男女が駅のホームで出会うところから始まる。年の暮れの雪国の町である。正男は久しぶりに再会した恵子の荷物を持ってやる。恵子の父が車で迎えにくる。正男はその車で家まで送ってもらう。正男は恵子の家の餅つきを手伝う。正男の家では雪囲いの作業が行われる。それぞれの家族の日常的な交際と相互の手助けが主人公の行動を通して描かれている。これらの場面を追いながら、具体的な言語表現についての解説を行い、次節でこの映画の学習項目を整理し、授受表現の基本的な用法についてまとめる。

授受表現を形成する要素としては、補助動詞の場合も本動詞の場合と同様、授受者、話し手の視点、文構造、待遇関係、移動の方向、表現場面などが考えられる。本動詞の場合は、授受物は与え手から受け手に移動する具体的な事物であるが、補助動詞の場合は、与え手の動作・行為についてであ

る。この点で両者は異なるが、授受に関する基本的な用法、立場のとらえ方はほぼ同様である。

基本的な文の枠組みとしては、次の3類7種（文構造では、ニ格、カラ格があるので9種）の型がある。

- (1) AガBニ（Cヲ）Vテヤル／アゲル／サシアゲル
- (2) BガAニ／カラ（Cヲ）Vテモラウ／イタダク
- (3) AガBニ（Cヲ）Vテクレル／クダサル

Aは与え手、Bは受け手、Cは動作対象、Vは動作動詞である。CはVに含まれる場合がある。具体的な発話では、この中の一つの表現が言語場面に合わせて選択され実現される。これらのことについて詳しくは、3.1.の項で解説する。

(1) 人間関係

この映画に登場する人物は次のとおりである。

正男：20歳ぐらい、恵子：20歳ぐらい

正男の父：50歳代、恵子の父：40歳代

正男の母：50歳代、恵子の母：40歳代

明夫：恵子の弟・13歳ぐらい

正男は恵子と幼なじみである。二人とも都会に出ているが、年末年始の休暇で帰省する。二人はおそらく大学生であろう。久しぶりの再会である。二人の実家は雪国の田舎町（この映画の撮影場所は新潟県六日町）にある。正男には50歳を過ぎた両親がいる。恵子には40歳代の両親と中学生ぐらいの弟明夫がいる。町の郊外に住む両家は親しい交際を続けている。

(2) 場面の構成

この映画の場面の構成・内容はおおよそ次のとおりである。

場面Ⅰ 駅の階段で（①～⑩）

- 正男と恵子の出会い、あいさつ（人物紹介）

- 雪国（舞台の設定）

- 帰省（故郷での年末年始）

場面Ⅱ 駅前で（⑫～③⑩）

- 出迎え、あいさつ（恵子の父登場）

- 車をすすめる、乗せてもらう

場面Ⅲ 車の中で（③⑪～④①）

- 滞在予定について

- 餅つきについて

場面Ⅳ 正男の家の近くで（④②～⑤⑩）

- 車に乗せてもらったお礼、あいさつ

場面Ⅴ 正男の家で（⑤①～⑥⑥）

- 帰宅のあいさつ（正男の母登場）

- 駅から家までの出来事について

- 餅つきについて

- おみやげ

場面Ⅵ 恵子の家で（⑥⑦～⑧⑧）

- 餅つき（恵子の母、弟明夫登場）

場面Ⅶ 正男の家で（⑧⑨～⑩③）

- 帰宅のあいさつ（正男の父登場）

- 雪囲いの手伝い

- 玄関でお茶を飲む

場面Ⅷ 雪国の風景

- 仕事が終わったねざらい

(3) 各場面ごとの言語表現等について

映画の各場面は、状況に応じていくつかの小場面に区切れる場合がある。

以下各場面あるいは小場面ごとに順を追って、そこで用いられた言語表現や状況等について解説する。

I 駅の階段で (①～⑪)

雪国の駅のホーム。この駅は上越線の六日町駅である。新潟県にあり、群馬県との県境に近い山間部である。今到着したばかりの列車から若い男がホームに降り立つ。この映画の主人公正男である。列車がホームを出ていくとあたりは一面の雪景色である。正男は階段付近で重そうな荷物を持った恵子に気づき、声をかける。

正男「①恵子さん。」

恵子「②あら、正男さん、しばらく。」

正男「③しばらくだね。」

④それ、重そうだね。

⑤持ってあげるよ。」

恵子「⑥じゃあ、その荷物、わたしが持つわ。」

正男「⑦うん。」

⑧元気だった？」

恵子「⑨ええ。」

⑩正男さんも？」

正男「⑪うん。」

①は呼びかけの言葉。正男は恵子の背後から相手の名前を呼んで注意を喚起している。他人に呼びかける場合、相手の姓を呼ぶのがふつうだが、ここでは相手の名前を呼んでいる。相手の名前を呼ぶのは、幼なじみ、親類の者、恋人どうし、目下の家族などかなり親しい間柄の場合である。正男と恵子は同郷の幼なじみであろう。この場面は映画的には主人公の人物紹介になっている。

②の「あら」は、女性が何かに気づいた時、意外な感じを受けた時に発する言葉。「しばらく」は、久しぶりに会った知り合いに対して用いるあいさつ。丁寧に改まって言う時には、⑬の「お久しぶりです」などを用いる。

③の「しばらくだね」は、男性が用いる。⑭も同様、参照のこと。女性は

「しばらくだ（です）わね」のように言う。

④の「それ」は、恵子の持っている荷物を指す。⑥の「その荷物」は正男の持っている荷物を指す。眼前指示の「こ・そ・あ」の「そ」の用法（第1課参照）である。「それ、重そうだね」の「～そうだ」は、荷物が見るからに重く見える様態（第20課参照）を言っている。このせりふにより、恵子が遠くからやってきたことが推測される。

⑤の「持てあげるよ」の「～てあげる」は、この映画の主要学習項目。正男が恵子のために荷物を持つ動作を好意的に行うことを示す。「～てあげる」の用例は、②③④⑤⑥にも提示されている。外国人学習者は、「（あなたの荷物を）持てあげる」と「（荷物を）持ちあげる」、「（二階に荷物を）持てあがる」などを混用しやすいので留意すること。

二人は親しげに元気な再会を喜びながら、駅の階段を上っていく。

⑧の「元気だった？」は、しばらく会っていない相手の安否をたずねるあいさつ。「別れて以来今まで元気でいたか」の意。ふつうは③に続けて発話することが多い。丁寧に言う場合には、「お元気ですか」「いかがですか」などを用い、「おかげさまで」と応ずる。

II 駅前で（⑫～⑳）

二人が駅を出ると、雪は降りしきり、あたり一面雪でうずまっている。

II-1 どのように家に帰るかについて（⑫～⑭）

正男は、雪の中をどうやって家に帰るかについて恵子にたずねる。

正男「⑫恵子さん、バスで帰るの？」

恵子「⑬父が迎えに来てくれるの。」

恵子「⑭あっ、来たわ。」

正男はバスで帰るつもりだったのだろうが、恵子はあらかじめ連絡しておいた父が車で迎えに来ることになっている。

⑬の「父」は、自分の父親のことを他人に言う時に用いる。直接父親に向かって呼びかける時には⑮のように「お父さん」と言う。「父が迎えに来てくれるの」は、父がわたしのために迎えに来るの意。「～てくれる」は行為の与え手が他者で、受け手が話し手の場合に用いる。「～てくれる」の用法は、③⑦④④④④⑤④④も参照のこと。

⑭「あっ、来たわ」は、向こうからこちらにやってくる車を恵子が発見した時の言葉。この場合の「た」は過去・完了の意味ではなく、「発見」の意味。何かを見出した時、気づいた時に用いる。

Ⅱ－２ 恵子の父親がやって来て（⑮～㉓）

迎えの車が二人の前に止まり、恵子の父が車から降りてくる。恵子の父も正男とは久しぶりの対面である。

恵子「⑮お父さん。」

父「⑯おお。

⑰正男君もこの列車だったのか。」

正男「⑱ええ。

⑲お久しぶりです。」

父「㉑しばらくだね。」

恵子「㉒そこで会って、荷物を持ってもらったの。」

父「㉓それは、どうも。」

正男「㉔じゃ。」

⑯は、久しぶりに会った娘からの呼びかけに対する父親の応答。親しい目下の者に用いる男性語である。車を降りて、二人に近づきながら娘の元気な姿をみて自然に発した感動詞である。

⑰の「正男君もこの列車だったのか」は、「正男君もこの列車で来たのか」あるいは「この列車に乗っていたのか」の意。「(正男)は(この列車)だ」の文型を用いた動詞の代替表現形式である。「～だったのか」は、相手に対

する質問ではなく、話者自身の確認、納得の気持ちを表す言い方。主に男性が用いる。イントネーションは下降調になる。「列車」は連結された長い一続きの車両。「急行列車／貨物列車」など長距離を運行するものに言うことが多い、短距離のものや、短い連結の車両については単に「電車」と呼ぶのがふつうである。正男も恵子も遠い都会から帰省したことがこの語からもうかがえる。

⑱は、久しぶりに会った人に対する改まったあいさつ。⑳は、男性のくだけた言い方。㉑㉒を参照のこと。

㉓の「荷物を持ってもらった」は、「(私は正男さんに)荷物を持ってもらった」の意で、行為の受け手恵子を主格の位置に置く言い方。行為の与え手正男を主格の位置に置けば、「正男さんが荷物を持ってくれた」となる。「～てもらおう」については㉗の用例も参照のこと。

㉔の「それは、どうも」は、「それは、どうもありがとう」を簡略にした言い方。親しい間柄やくだけた場面で用いる感謝の言葉。「それは」の「それ」は「娘のために荷物を持ってくれたこと」を指す。前に述べたことを受けてその事柄を示す文脈指示の用法である。㉕も参照のこと。

㉖の「じゃ」は「では」の縮約形。次の行動を始めるための言葉。「じゃ、ぼくの荷物を(もらいます)。」の意。正男は恵子が持っていた自分の荷物を受け取っている。

II-3 正男を車で送ることについて(㉔～㉗)

恵子の父は、荷物を車のトランクへ運び、正男に車に乗るようにすすめる。

父「㉔さっ、正男君もどうぞ。」

正男「㉕えっ。」

父「㉖送ってあげよう。」

正男「㉗いいんですか。」

父「㉘どうぞ。」

正男「㉙それじゃあ、乗せていただきます。」

③⑩じゃ。」

②④の「さっ」は、正男に対する乗車のすすめ。相手に逡巡なく行動するようにうながす呼びかけの言葉。相手を誘う時に用いる「さあ」よりも即座の行動を強くうながす気持が強い。

②⑥の「送ってあげよう」は、恵子の父が正男を家まで送る意志の表示。恩恵的行為の与え手が恵子の父、その受け手が正男。「～てあげる」の用例は、⑤⑫⑬⑭も参照のこと。

②⑦の「いいんですか」は「同乗してもいいのか、迷惑にならないのか」の意で、ためらいの気持ちが含まれている。即座に応諾せず相手の立場を考える態度を示すことは、ある種の礼儀である。

②⑨の「それじゃあ」は、相手の申し出を受け入れるための前提句「それでは」のくだけた言い方。縮約形は「じゃあ」「じゃ」になる。④⑪を参照のこと。「乗せていただきます」は、「乗せてもらいます」の丁寧な言い方。目上の人への行為を感謝して受ける丁寧な表現である。「～ていただく」の用例は⑫にも提出されている。

Ⅲ 車の中で (③⑪～④⑪)

恵子の父が運転する車は、恵子と正男を乗せて走り出す。この映画では、恵子と正男は後部座席に乗り助手席が空けてあるが、これは撮影上の便宜からであろう。ふつうならば、オーナードライバーである父親の横に、正男か恵子が乗るべきであろう。

雪道を走る車の中で3人の親しい会話がはずむ。

Ⅲ-1 いつまで滞在するかについて (③⑪～④⑪)

車を運転する恵子の父が、正男に話しかける。

父 「③⑪正月は、いつまでこっちにいられるんだい。」

正男 「④⑪5日までいます。」

父 「㉔あ、そう。」

㉔ゆっくりできていいね。」

㉔「正月」は、新年1月のこと。新年の行事の終わる1月初旬から中旬ぐらいまでを指すこともある。ここでは正月休みを意味している。「こっちにいられるんだい」は、こちらに滞在できるのかの意で、親しみをこめただけの言い方。㉔「ゆっくりできる」は、のんびりと過ごすことができるの意。

III-2 餅つきについて(1) (㉔~㉔)

話題は、例年暮れに行う恵子の家の餅つきに移る。

恵子「㉔お父さん、あした、お餅つきでしょう。」

父 「㉔ああ。」

㉔正男君、今年も手伝ってくれるかい。」

正男「㉔ええ。」

㉔何時から始めますか。」

父 「㉔今年は、9時ごろからにしようよ。」

正男「㉔じゃあ、9時少し前に行きます。」

㉔「お餅つき」の「お」は美化語。上品に言う時、女性が多く用いる。餅つきは、炊きあがった餅米を臼に入れ、杵でついて餅にすること。正月には餅を食べるならわしがあり、年末に餅つきをする。最近都会では、できあいの餅を店から購入する家庭が多くなり、餅つきの風習はあまり見られなくなった。「お餅つきでしょう」の「でしょう」は、推量した事柄について相手に確認を求める場合の用法で、イントネーションは上昇調。(第10課参照のこと)

㉔の「手伝う」は、仕事を手助けすること。餅つきには相当の労力が必要なので、人手のある家ではよその家へ手伝いに行く。㉔㉔㉔㉔を参照のこと

と。「手伝ってくれるかい」は、正男が手伝うという行為の与え手、話し手である恵子の父が行為の受け手。「～てくれる」の用例は⑬⑭⑲⑳㉑㉒にも提出してある。「～かい」は、くだけた話し言葉で男性が用いる文末助詞。質問や確認の意で用いる。「～てくれるかい」の言い方は、親密な間柄にある目下の者に用いる。㉑「～てくれ」、㉒「～てくれないか」も同様である。

㉒「９時ごろからにしようよ」の「～にする」は、話し手の意志や行動を決定する言い方。９時ごろから開始することに決めようの意。

IV 正男の家の近くで (㉒～㉕)

車が止まり、正男が降りる。

正男「㉒送っていただいて、ありがとうございました。」

父「㉓いや、いや。」

㉒あした９時に来てくれるね。」

正男「㉓はい。」

㉒じゃ、あしたの朝。」

恵子「㉔待っているわ。」

正男「㉕うん。」

㉒じゃ。」

恵子「㉕さようなら。」

㉒「送っていただいてありがとうございました」は、送り手に対する正男の丁寧な感謝の言葉。送り手である恵子の父が恩恵的行為の与え手、正男はその受け手。「～ていただく」は、受け手側に話し手の視点がある場合に用いる。与え手側に話し手の視点がある場合には「送ってください」となる。「～していただいてありがとうございました」の形は、連用中止法「～していただき、ありがとうございました」の形式で言うこともできる。改まった手紙などの文章では、後者の形式がよく用いられる。

㉓「いや、いや」は、相手の発言を受けて、それを打ち消す応答語。「い

いえ、どういたしまして。そんなに丁重に感謝されるほどのことではありません。」の意。主に年配の男性が用いる。

④④の「来てくれる」の行為の与え手は正男、受け手は恵子の父。「～てくれる」は、⑬②⑦④③⑤⑩の用例も参照のこと。

V 正男の家で① (⑤①～⑤④)

正男が帰宅する。玄関の戸をあけると、母親が奥から出てきて正男を迎える。

V-1 家に着いてのあいさつ① (⑤①～⑤④)

正男「⑤①ただいま。」

母「⑤②ああ、お帰り。」

⑤③外は、寒いでしょう。」

正男「⑤④ううん。」

⑤①は、外から帰宅した者が言うあいさつ。ただ今帰りましたの意。⑤②は、帰宅した息子を迎える母親のあいさつ。一般的な形は「お帰りのさい」である。母親は息子に対して、短い略形式を用いている。帰宅のあいさつは⑤③⑤④にも提示されている。⑤③は、雪道を帰宅した息子に対するねぎらい、思いやりの言葉。あいさつでは、天候や寒暖について触れることが多い。

⑤④の「ううん」は、否定的な意味の返事。この「ううん」は、「いや、わたしはそんなに寒く感じない。」という意味で、軽く応答したもの。なお、「うん」は、「はい」「ええ」のぞんざいな言い方。多く男性が用いる。

V-2 駅から家までの出来事について (⑤⑤～⑤⑩)

正男「⑤⑤駅で恵子さんに会ってね。」

母「⑤⑥あら、そう。」

正男「⑤⑦恵子さんのお父さんに車で送ってもらったよ。」

母 「㉔そう。

㉔送ってくださったの。」

正男 「㉕うん。」

母 「㉕それは、よかったわね。」

㉔「車で送ってもらったよ」の行為の与え手は恵子の父、恩恵的行為の受け手は正男。話し手は行為の受け手である正男、聞き手は正男の母親である。恵子の父が同席していれば、話題の人物である恵子の父に敬意を示し、「送っていただいた」と言うだろうが、ここでは、身内どうしのくだけた会話なので「～てもらう」を用いている。それに対し、母親のほうは、㉔「送ってくださったの」と丁寧な言い方をしている。くだけた言い方なら「送ってくれたの」となるが、行為の与え手である恵子の父を意識して、尊敬語を用いている。年配の女性は、上品な言葉づかいを用いることが多いようである。

居間には、暖房器具の石油ストーブ、こたつが置かれている。こたつは、炭火などを四角いやぐらで囲い、その上にふとんをかけ、足などを入れて温まるもの。最近は炭火のかわりに電気ヒーターを用いたものが多い。家族や親しい来客がこたつを囲み、団らんの場所とする。母親は遠くから帰宅した正男にお茶を入れてやる。

㉕「それ」は、「恵子の父に車で送ってもらったこと」を指す文脈指示の用法。㉔を参照のこと。

V-3 餅つきについて(2) (㉔～㉕)

母 「㉔正男、今年も、お餅つきを手伝ってあげるんでしょう。」

正男 「㉔あ、約束したよ。

㉔はい、おみやげ。」

母 「㉕ありがとう。

㉕はい、お茶。」

⑥②「手伝ってあげる」の行為の与え手は正男。話し手である母親は、恩恵的行為の受け手恵子側に対し、与え手正男側の人物であるから「～てあげる」を用いる。「～てあげる」の用側は⑤②③⑥にも提出されている。正男は、例年、恵子の家の餅つきを手伝っていた。このことは「今年も」の言葉から推察される。母親は息子に対して「正男」と名前を呼び捨てにしている。目下の身内に対しては、ふつうこのように名前を呼び捨てにすることが多い。⑥③の「恵子」、⑦⑦⑧の「明夫」の例も同様である。なお、学校の同級生や下級生に対しては「山田」のように姓の方を呼び捨てにする。

⑥③の「約束」は、相手と取り決めたこと。ここでは餅つきを手伝うこと。「人と約束（を）する」「約束を守る／果たす」「約束を破る」のように用いる。

⑥④および⑥⑤の「はい」は、肯定の返事ではなく、相手の注意を喚起するための掛け声。したがって「ええ」とは置きかえられない。⑦④⑦⑤の「はい」も同様（第13課参照）。「おみやげ」は、旅行や外出をした時に持ち帰り人に贈る品物、あるいは他家を訪問する時に持参する贈り物。「プレゼント」とは使用場面が異なるので留意すること。菓子折などを手みやげに持参することが多い。

⑥⑥は息子からのおみやげに対する母親のお礼の言葉。⑥⑥「お茶」は「お茶をどうぞ」の意。親しい身内どうしの会話なので文末省略の形が使われている。

VI 恵子の家で（⑥⑦～⑥⑧）

翌朝の恵子の家。恵子の家は、広い土間のある旧家のようなものである。画面では、すでに餅つきが始まっている。きねの音と共に、恵子、正男の掛け声が聞こえる。

VI-1 餅をついて（⑥⑦～⑦⑦）

（掛け声）「（と）はい。（それ）はい。（よいしょ）はい。よいしょっと。」

正男「⑥⑦あー、暑い。」

父 「⑥⑧恵子、正男君にてぬぐいを持ってきてあげなさい。」

恵子「⑥⑨はい。」

父 「⑦⑩あっ、明夫にも持ってきてやりなさい。」

正男と恵子の掛け声は、つき手ときね取りの二人がお互いに調子を取りながら発する声。正男の「と」「それ」「よいしょ」は、力を込めて物事を行う時の掛け声。「よいしょ」は重い物を持ち上げたりかついだりする時に発する。⑦⑩「よいしょっと」も同じ。恵子の「はい」は、相手の注意を喚起したり、調子をとったりする時に発する。リズムが狂うとうまくつけず危険である。

⑥⑧の「持ってきてあげる」行為の与え手は恵子、受け手は正男。「持ってくる」行為の命令者は話し手である恵子の父親。汗をかいだ正男のためにする行為を娘に命じている。行為の受け手が身内ではない正男なので「～てあげなさい」を用い、⑦⑩の息子明夫のためには「～てやりなさい」の表現が使われている。「～てあげる」の用例は⑤⑥⑧⑨も参照のこと。「持ってくる」は、動詞「持つ」に補助用言「てくる」の結びついた形。意味は「持ち運ぶ」ことであるが、移動の方向が関係するので注意すること。話し手の位置に近づく移動は「持ってくる」、話し手から遠ざかる移動は「持っていく」である。「～ていく」「～てくる」は、話し手と聞き手の立場が関与する境遇性を有する語である。詳しくは第14課の解説を参照されたい。

「てぬぐい」は、手や顔などを拭くのに使う長方形の薄い木綿の布。簡単な絵柄や文字が染めてある。最近では、ハンカチやタオルを用いることが多い。

VI-2 餅を運んで (⑦⑪～⑦⑬)

恵子は、つき上がった餅を母親のところへ運ぶ。母親は餅をのす役をしている。

恵子「㉑はい、どうぞ。」

母「㉒はい、どうも。」

㉓よいしょっと。」

㉑㉒は、物の受け渡しをする場合のやりとり。㉑の「はい」は相手の注意を喚起するための掛け声。㉒㉓の「はい」も同様。㉒の「はい」は受け答えとしての返事。「どうも」は軽いねぎらいの気持を表す言葉。㉓「よいしょっと」は重い物を持ちたり、置いたりする時の掛け声。年配になり身体を動かすこと自体が大儀になると、簡単な動作にもこの声を発することがある。

VI-3 てぬぐいを渡して(㉔～㉗)

明夫が餅米を入れた蒸籠（せいろう、せいろうとも言う）を持ってくる。明夫は蒸籠を運ぶ役である。恵子は、てぬぐいを正男と明夫に渡す。

恵子「㉔はい、正男さん。」

正男「㉕あっ。」

恵子「㉖はい、明夫。」

明夫「㉗はい。」

父「㉘明夫、それを持っていてやるよ。」

明夫「㉙うん。」

㉚これで終わりだよ。」

㉘の「それ」は、明夫の持っている蒸籠を指す。ここでは、身内の目下の者に対しての発言なので「～てやる」が用いられている。息子が汗をぬぐう間、父が息子のために「蒸籠を持っている」のである。恩恵的行為の与え手が父、受け手が息子の明夫である。「～てやる」の用例は、㉚にも提示されている。

㉚「これで終わりだ」の「これで」は、この回で、この蒸籠での意ともとれるし、また、この仕事が済めばという気持から、連続して行われていた動

作の最終場面で言う表現ともとれる。㉔の「これで」の用法を参照のこと。

「終わりだ」は「(仕事が) 終わりになる」の意。明夫は空になった蒸籠を持っていき、正男は臼に入れた餅米をこね始める。

VI-4 餅をつき始めて (㉕~㉘)

正男がきねを取り上げて餅をつこうとすると、恵子の父が交代しようと言う。母親もきね取りの役を恵子に代わる。

正男「㉕それ。」

父「㉖今度は、わたしが代わろう。」

正男「㉗じゃ、お願いします。」

母「㉘正男さんが手伝ってくれたので、助かったわ。」

正男「㉙いいえ。」

母「㉚恵子、代わってあげるわ。」

恵子「㉛そう。」

㉜じゃあ。」

(掛け声)「はい、(ほっ) はい、(はい) はい。」

㉕の「それ」は、力を込めて作業を開始する時の掛け声。㉖の「今度」は、これから行われる場合を指す。「今度」には、最も近い時期に行われた場合を指す「前回」の意味と、㉚のように、今後最も近い時期に行われる「次回」の意味の二つの用法があるので注意する必要がある。「代わろう」の「代わる」は「(役割を) 交代する」の意味。「かわる」には「変わる(変化する)」「代わる(代理をする、交代する)」「換(替)わる(交換する、入れ替わる、交替する)」など多様な意味・用法があるので注意すること。

㉘「正男さんが手伝ってくれたので、助かったわ」は、恵子の母が正男に対する感謝の気持ちを表した言葉。わたしたちのために仕事を手伝ってくれたので、おかげさまで労力が少なくて済んだの意。行為の与え手は正男、受け手は恵子の家族、話し手は家族の一員である母親、親しみを込めた独白的

表現なので、「～てくださった」でなく「～てくれた」の言い方を用いている。「～てくれる」の用例は⑬②⑦④④③⑤⑩にも提出されている。

⑥「代わってあげるわ」は、母親が行為の与え手、娘恵子が受け手である。この場合、「～てやる」を用いることもできるが、女性が使うとかなり乱暴な響きになる。他人の正男が脇にいて、母親の発言を聞いていることも意識され、上品な言葉遣いを選んだのであろう。談話場面におけるワキの聞き手が美化的表現を選択させたと考えることができよう。「～てあげる」の用例は⑥③③③③にも提示されている。

「はい、(ほっ)」は、餅つきをする恵子の両親の掛け声である。この声は、きねの上げ下ろしのリズムに合わせて調子をとるためのものである。

VII 正男の家で (⑧⑨～⑩④)

恵子の家で餅つきを終えた正男は、その日の午後、母親といっしょに買物をして帰宅する。正男の父親は防雪のため雪囲いをなおしている。

VII-1 家に着いてのあいさつ(2) (⑧⑨～⑩②)

母 「⑧ただいま。」

父 「⑩ああ、お帰り。」

正男 「⑩手伝おうか。」

父 「⑩ああ。」

⑧⑨は家族間での帰宅のあいさつ。⑩の「ああ、お帰り」は、簡潔な短い言い方の中に妻に対するいたわりの気持ちが込められている。⑤③の母親と息子のやりとりも同様である。

⑩「手伝おうか」は、正男が父親の作業を見ての発話。雪囲いの作業は、家族全員の利害にかかわる作業なので、「手伝ってやる／あげる」などの表現は用いない。この表現を用いると、恩着せがましくなり不適切である。

VII-2 父の作業を手伝って (93~98)

正男は、荷物を家に置いて、雪囲いの作業を手伝うため玄関から出てくる。父親と共に降りしきる雪の中で作業をしばらく続けていると、お茶の支度をした母親が玄関から声をかける。

父 「93そここのひもを取ってくれ。」

正男 「94うん。」

父 「95ここを押さえてくれないか。」

正男 「96ああ。」

母 「97お父さん、お茶が入りましたよ。」

父 「98ああ、もうすぐ終わりだ。」

降雪の多い地方では冬になると、家の入口や周囲に丸太・竹・板、などで支えをし、藁(わら)・蓆(むしろ)・簀(す)の子などで囲いを設け、雪の被害を防ぐ。庭の草木なども蓆などで覆い包む。これを「雪囲い」と言う。

93の「ひも」は雪囲いの竹棒などを結び付けるためのもの。「ひもを取ってくれ」の行為の与え手は正男、受け手は話し手の父親。息子に仕事を命ずるので命令の形を用いている。目上の者や他人に対してなら、依頼の形「取ってください」を用いるのがふつう。

95「ここを押さえてくれないか」の動作の与え手は正男、受け手は話し手である父親。正男が押さえてやり、父親が押さえてもらうのである。話し手である父親の立場からの依頼なので「押さえてくれ」となる。「～てくれないか」という否定の問いかけ形式は、相手の意向を問う形なので、直接的な命令表現に比べ、丁寧度がやや高い。「～てくださいますか」ならば最も丁寧度が高く、息子に対する父親の発言では用いられない。「～てくれる」の用例は93 97 94 94 93 98にも提示してある。

97の「お父さん」は、子供のいる妻から夫への呼びかけ。親族間の呼びかけは、その家族の中の一歩目下の者が用いる呼称を使うことが多い。末子が父親に対して用いる「おとうさん／とうさん／とうちゃん／パパ」などの呼

称を他の家族が援用するのである。子供が父親に呼びかける用例は、⑮③⑤に、他人の父親のことを言う用例は⑤⑦に提示されている。

VII-3 玄関に入って(⑨⑨～⑩⑩)

正男と父親は作業を終え、お茶を飲みに入家に入る。母親はお茶を入れる。

父 「⑨⑨あーあ。」

母 「⑩⑩寒かったですしょう。」

父 「⑩⑩正男が手伝ってくれたので、早く終わったよ。」

母 「⑩⑩これで、大雪が降ってもだいじょうぶね。

⑩⑩ごくろうさま。」

⑩⑩は、屋内にいた母親が外で働いていた二人に向けてのおもいやりの言葉。⑤③では「外は寒いでしょう」と現在の状態を推測する言い方が用いられているが、ここでは仕事を終えた二人の立場に立って「寒かったですしょう」と表現している。

⑩⑩「正男が手伝ってくれた」は、正男が動作の与え手、父親が受け手。話し手である父親の立場から「～てくれた」を用いている。「～てくれる」の用例は、⑬②⑦④④④③⑤にも提出されている。

⑩⑩の「これで」は、雪囲いの作業が終わったのでの意。連続的に行われていた動作が一段落した場面で用いる。⑩⑩を参照のこと。「大雪が降っても」は、「たとえ、大雪が降ったとしても」の意で、逆説仮定条件を表す(第23課参照)。「大雪」は激しく大量に降る雪。「小雪」に対して言う。雪国では、積雪2～4メートルに達することもあり、特に激しい大雪を「豪雪」と言うこともある。

⑩⑩の「ごくろうさま」は、仕事を終えた人に対する感謝をこめたねぎらいの言葉。ふつう、仕事の依頼者が依頼された者に、上位者が下位者に対して用いる。

3. この映画の学習項目の整理

2.2.では、この映画の構成・内容に則して言語表現上の問題や言語場面に
ついて述べた。この章では、第26課に引き続き、主要学習項目である「やり
・もらいの表現」（補助動詞としての用法）と、あいさつ応答等の表現、男
女による言葉遣いの差異について整理し解説する。

3.1. やり・もらいの表現(2)——補助動詞としての用法

授受表現に関する動詞「やる／もらう／くれる」等の本動詞の場合の用法
については第26課で解説した。補助動詞の用法についても基本的な使い分け
は、本動詞の場合とほぼ同様なので、第26課の解説も参照されたい。

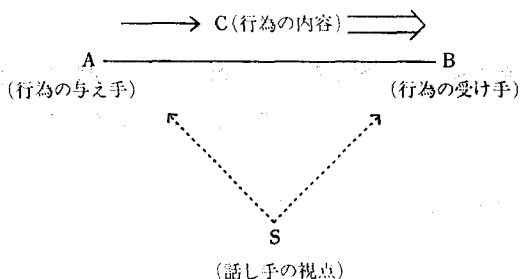
やり・もらい動詞の補助用言には、2.2.2.で述べたように「～てやる／～
てあげる／～てさしあげる」、「～てもらう／～ていただく」、「～てくれる／
～てくださる」の3類7種の語句がある。ここでは、まず「～てやる」「～
てもらう」「～てくれる」の三つの語句の使い分けについて述べる。

この使い分けには、本動詞の場合と同様、授受者（行為の与え手、受け
手）に関する話し手の視点、授受の移動の方向、行為の内容、表現場面、待
遇度など種々の条件が関与する。これらの条件について考察してみる。

3.1.1. 話者の視点と授受者

最も基本的な表現は、図1に示した関係による。以下の図では、授受の移
動方向を矢印（→テヤル、⇒テモラウ、⇨テクレル）で表示する。なお、「テ
ヤル」は「てやる、てあげる、てさしあげる」を代表し、「テモラウ」は「て
もらう、ていただく」を、「テクレル」は、「てくれる、てくださる」を代表
するものとする。

(図1)



この図で、話し手の視点が行為の与え手A側にあれば、その表現は、

〔1〕 AがBニCヲシテヤル

となる。

ただし、「恵子の父が正男を送ってやった」のように、受け手が動詞の直接目的語である場合、言い換えれば、行為内容Cに受け手が含まれる場合には、

〔1〕' AがBヲシテヤル

となる。

話し手の視点が行為を受け入れる受け手B側にあれば、

〔2〕 BがAニ／カラCヲシテモラウ

となる。同一の授受行為を、A、Bどちら側の視点から表現するかによって補助動詞の選択が異なるのである。「～てやる／～てあげる／～てさしあげる」は、行為の与え手側に話し手の視点がある場合に用いる補助動詞で、「～てもらう／～ていただく」は、行為の受け手側に話し手の視点がある場合に用いる補助動詞である。

この場合の文構造は、「～テヤル」では、「ガ格（主語）」の位置に行為の与え手を置き、「ニ格（間接目的語）」に受け手を置く。行為内容Cは、動詞によって「ヲ格（直接目的語）」として表される場合と表されない場合がある。例えば、他動詞「教える」なら「英語を教えてやった」のように「ヲ格」が示されるが、自動詞「行く」の場合には、「銀行へ行ってやった」の

ように「ヲ格」は現れない。サ変動詞「する」の場合は、語句の複合度や文脈によって、「友だちに電話してやった」「友だちに電話をしてやった」のように、「ヲ格」が現れる場合と現れない場合がある。「ニ格」も、「弟のシャツを洗ってやった」のように、文脈によって現れない場合もあるし、あるいは「弟のためにシャツを洗ってやった」のように「ノタメニ」を用いることもある。実際の談話では、多くの場合、この映画の会話のように、すべての格が顕現されないことが多い。

「～テモラウ」では、「ガ格」の位置に行為の受け手を、「ニ／カラ格」の位置に行為の与え手を置く。格の顕現については「～テヤル」の場合と同様である。

映画の中で用いられた次の表現は、この系列のものである。

恵子の父（恵子に）「㉔明夫に持ってきてやりなさい。」

（恵子が明夫ニてぬぐいヲ持ってきてテヤル）

正男の母「㉕正男、今年もお餅つきを手伝ってあげるんでしょう。」

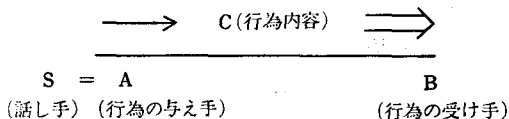
（正男が恵子の家の餅つきヲ手伝ってテヤル）

恵子の父「㉖恵子、正男君にてぬぐいを持ってきてあげなさい。」

（恵子が正男ニてぬぐいヲ持ってきてテヤル）

話し手自身が授与行為の当事者（行為の与え手、または受け手）である場合には、次の図2、図3の形式が用いられる。

（図2）



〔3〕 私ガBニCヲシテヤル

〔4〕 Bガ私ニ／カラCヲシテモラウ

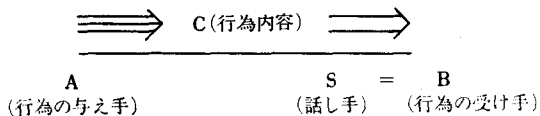
ただし、「私が正男を送ってやった」のように、受け手が行為の直接目的

そのものである場合には、

〔3〕' 私ガBヲシテヤル

の形式をとり、「ニ格」は「ヲ格」に変わる。

(図3)



〔5〕 Aガ私ニCヲシテクレル

〔6〕 私ガAニ／カラCヲシテモラウ

ただし、「恵子の父が私を送ってくれた」のように、話し手である受け手が行為の直接目的そのものである場合には、

〔5〕' Aガ私ヲシテクレル

の形式をとり、「ニ格」が「ヲ格」に変わる。

(図2), (図3)において、話し手自身が行為の与え手の場合、その表現形式は基本的には(図1)の場合とまったく同じである。しかし、話し手自身が行為の受け手の場合には、与え手の行為について補助動詞は、「～テヤル」でなく、「～テクレル」が用いられる。格の顕現については、前述の「～テヤル」とほぼ同様である。

この映画の中で用いられた次の表現は、この系列のものである。

話し手自身が行為の与え手の場合

恵子の父「㊸明夫、それを持っていてやるよ。」

(私ガ明夫ノタメニそれヲ持っていテヤル)

正男(恵子に)「㊹持ってあげるよ。」

(私ガ恵子ノタメニ荷物ヲ持ッテヤル)

恵子の父(正男に)「㊺送ってあげよう。」

(私ガあなたヲ送ッテヤル)

恵子の母（恵子に）「㉔恵子，代わってあげるわ。」

（私があなたノタメニ仕事ヲ代わッテヤル）

話し手自身が受け手で，話し手の視点が行為の受け手側，受入れにある場合

恵子（父に）「㉒そこで会って，荷物を持ってもらったの。」

（私が正男ニ荷物ヲ持ッテモラウ）

正男（母に）「㉓恵子さんのお父さんに車で送ってもらったよ。」

（私が恵子の父ニ送ッテモラウ）

正男（恵子の父に）「㉔それじゃあ，乗せていただきます。」

（私があなたニあなたの車ニ乗セテモラウ）

正男（恵子の父に）「㉕送っていただいて，ありがとうございました。」

（私があなたニ送ッテモラウ）

話し手自身が受け手で，話し手の視点が行為の与え手側，発出にある場合

恵子（正男に）「㉖父が迎えに来てくれるの。」

（父が私ヲ迎えに来テクレル）

恵子の父（正男に）「㉗正男君，今年も手伝ってくれるかい。」

（正男が私たちノタメニ餅つきヲ手伝ッテクレル）

恵子の父（正男に）「㉘あした，9時に来てくれるね。」

（正男が私たちノタメニ来てクレル）

恵子の母（正男に）「㉙正男さんが手伝ってくれたので，助かったわ。」

（正男が私たちノタメニ餅つきヲ手伝ッテクレル）

正男の父（正男に）「㉚そこのひもを取ってくれ。」

（正男が私ニひもヲ取ッテクレル）

正男の父（正男に）「㉛ここを押さえてくれないか。」

（正男が私ノタメニここヲ押さえテクレル）

正男の父（正男の母に）「㉜正男が手伝ってくれたので，早く終わったよ。」

(正男ガ私ニ仕事ヲ手伝ッテクレル)

なお、「ノタメニ」の用法については次節で触れる。

3.1.2. 文構造について

やり・もらいの補助動詞を用いた表現を文の形式からまとめると、次のような文型が抽出できる。

文型1 (与え手)ガ(受け手)ニ(ある行為)ヲシテヤル

文型2 (受け手)ガ(与え手)ニ／カラ(ある行為)ヲシテモラウ

文型3 (与え手)ガ(受け手)ニ(ある行為)ヲシテクレル

ただし、文型1、文型3で、受け手または受け手の所有物が行為の直接対象となる場合には、

文型4 (与え手)ガ(受け手)ヲシテヤル／テクレル

文型5 (与え手)ガ(受け手)ノ(所有物)ヲシテヤル／テクレル
となる。

文型2の「テモラウ」の場合には、与え手を示す助詞は「ニ」と「カラ」が使えるが、文型1、文型3では「カラ」は使えない。「カラ」は行為の出所・出自を示すものだからである。

文型1、文型3の「ニ」は、動作の対象となる受け手を示すものであるが、動作の結果が及ぶ人物や利益恩恵等を享受する人物を特に明示する場合には、「ノタメニ」が用いられる。次の例を見てみよう。

[7]—① 子供に本を買ってやった。

子供のために本を買ってやった。

[7]—② 妹に手紙を託してくれた。

私たちのために妹に手紙を託してくれた。

①の例では、動作の受け手も、恩恵を享受する者も同一人物「子供」であるが、②の例では、動作の直接の受け手は「妹」、恩恵を享受する者は「私

たち」である。

3.1.3. 移動の方向と話し手の意識

本動詞の場合と同様、やり・もらいの補助動詞の用法には、行為の結果が影響を及ぼす移動方向と、授受者に対する話し手の区分意識が関与する。

次の図4により、このことを検討してみよう。

(図4)

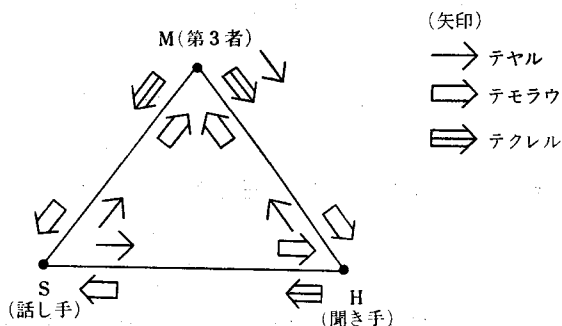


図4で示した関係を文例で示せば次のようになる。ここでは、S (話し手)を「私」、H (聞き手)を「あなた」、M (第3者)を「あの人」とし、授与行為を仮りに、Sが「日本語を教えた」、Hが「英語を教えた」、Mが「フランス語を教えた」としておく。

ア. (S→M)

[8]—① 私はあの人に日本語を教えてやった。

[8]—② あの人は私に (から) 日本語を教えてもらった。

イ. (S→H)

[9]—① 私はあなたに日本語を教えてやった。

[9]—② あなたは私に (から) 日本語を教えてもらった。

ウ. (H→M)

[10]—① あなたはあの人に英語を教えてやった。

[10]—② あの方はあなたに(から)英語を教えてもらった。

エ. (H→S)

[11]—① 私はあなたに(から)英語を教えてもらった。

[11]—② あなたは私に英語を教えてくれた。

オ. (M→S)

[12]—① 私はあの人にフランス語を教えてもらった。

[12]—② あの方は私にフランス語を教えてくれた。

カ. (M→H)

[13]—① あなたはあの人に(から)フランス語を教えてもらった。

[13]—② あの方はあなたにフランス語を教えてくれた。

[13]—③ あの方はあなたにフランス語を教えてやった。

図4から、以上ア. からオ. までは、①②2種類の文、カ. では①②③3種類の文、合計6方向13種類の文が作例できる。実際の発話場面で、①②、あるいは③のどの文を用いるかは、話し手が聞き手や話題の人物間の関係をどのようにとらえているか、あるいは前後の文脈や場面に応じた話題の設定の仕方をどのようにするかによって決まる。一般的に言えば、授受者の文頭提示は、話し手、聞き手、第3者の順位で行われるのが自然である。

ここで問題となるのは、カ. (M→H) の場合である。作例③が不自然な文に感じられることがあろうが、それは、S、H、M3者の人間関係が具象化されていないためである。仮りに、Hを話し手の弟、Mを話し手の友人山田とした場合には、

[13]'—②' 「山田さんはおまえにフランス語を教えてくれた (んだね)。」

となるが、Hを友人山田、Mを話し手の弟とした場合には、

[13]'—③' 「弟はあなたに英語を教えてあげた (んですね)。」

となる。弟は自分の身内であり、話し手側に属する人物だからである。この

ことを図で示せば次のようになる。

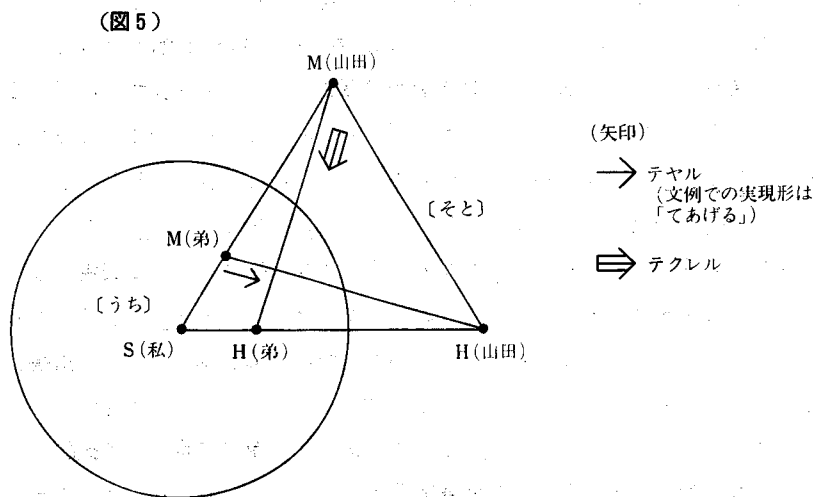


図5で、話し手の区分意識は「うち」と「そと」の関係にある。授受の移動方向が「うち」から「そと」の場合には、「～テヤル」を用い、「そと」から「うち」の場合には、「～テクレル」を用いる。「～テモラウ」は「そと」から「うち」への移動方向である。

この映画の中の会話、「㊤正男さんが手伝ってくれたので、助かったわ。」では、恵子の母が正男を「そと」側の人物としてとらえており、「㊤正男、今年も、お餅つきを手伝ってあげるんでしょ」では、正男の母が正男を「うち」側の人物としてとらえている。

3.1.4. 授受行為の内容について

補助動詞を用いた「やり・もらい」表現は、与え手が受け手になんらかの利益・恩恵を授ける場合に用いることが多い。そこには、受け手がある行為の受益者であり、なんらかの意味で、得する、為になる、役立つような行為内容が見られる。状況場面としては、援助、救助、援護、助勢、助力、支援、手助け、手伝い、手を貸す、手を借りる、世話をする、世話になるよう

な場合に多く使われる。この映画でも、人の荷物を持つ、人を出迎える、人を車で送る、仕事を手伝うという場面での表現が提示されている。

ただし、「してやる」「してくれる」は、恩恵的行為の授受のほかに、「目にもものを見せてやる」のように、動作者が積極的に行う行為を表すのに用いることもある。鈴木丹士郎（1972）は、「大金をふんどくってやる」「腹が立ったのでどなりつけてやった」の例を挙げ、これらは利益どころか相手に不利益を与える表現であるとしている。「とんだことをしてくれたなあ」「よくひとの顔に泥を塗ってくれたなあ」も不利益（害）を受ける表現となるとしている。鈴木重幸（1972）も「おまえなんかころしてやるぞ」「あまりにくらしいから、すこしからかってやった」などの例を挙げ、対象に損害を与える場合にも用いられることがあると述べている。これらの表現が成立する条件については、さらに検討する必要がある。受身表現との対比的考察も必要な課題である。日本語の受身表現は、不利益、迷惑の意を表す場合に多く用いられる一方、「祖母に育てられた」「祝賀会に招待された」のように、利益や恩恵的行為の受容にも用いられる場合があるからである。また、「やり・もらい」の本動詞に補助動詞の付いた「欲しけりや、くれてやる」「ただでくれるなら、もらってやる」などの表現も興味深い分析対象である。

3.1.5. 待遇度

待遇表現については、解説書29課、30課で扱われるので、ここでは簡単に解れるにとどめる。

補助動詞の場合も、本動詞の場合と同様、待遇度はほぼ次表のように示すことができる。

系 列 \ 待遇度	待遇度		
	低	中	高
(テヤル)	てやる	てあげる	てさしあげる
(テモラウ)	てもらう		ていただく
(テクレル)	てくれる		てくださる

「てやる、てもらう、てくれる」は、待遇度の低い言い方、または中立的な言い方、「てあげる、ていただく、てくださる」は、より待遇度が高く、丁寧な言い方、「てさしあげる」は特別丁寧な言い方である。待遇意識は、人により場合により差があり、具体的場面での受けとめ方はそれぞれ異なるだろうが、一般的に言って、テヤル系列は上の表の左から右へ待遇度がしだいに移動してきているようである。「てやる」は特に待遇度が低く、「てあげる」がこれに替わりつつある。これには、表現に対する美化意識が関与しているものと考えられる。このことについて詳しくは第26課の解説を参照されたい。

「やり・もらい」の補助動詞を用いた特別な敬語表現形式として、使役動詞に付けた形がある。

[14] 先生にお話を聞かせていただきました。

先生がお話を聞かせてくださいました。

私が御案内させていただきます。

私にも一曲歌わせてください。

などの言い方である。表現を丁寧にしたり、話し手の意向を丁重に表す言い方である。これらは、話し手の行動「話を聞く」「案内する」「歌う」などが、相手の恩恵的な行為授与の結果、実現されるものとしてとらえる、あるいは、相手の命令、指示を受けて行動するという態度を表明することにより、丁重さを示すものである。待遇度が非常に高いので、いんぎんな言い方になるが、場面や状況によっては馬鹿丁寧な感じを与えることもある。

3.2. あいさつ等の表現(2)

第26課に続き、この映画で提示された「あいさつ」語を取り上げ、解説する。

3.2.1. 人と再会した時

知人・友人とある期間をおいて再会した時のあいさつは、その期間の長短

によって言い方が異なる。

次の会話は、長い間会わなかった同郷の親しい男女のあいさつである。

正男「①恵子さん。」

恵子「②あら、正男さん、しばらく。」

正男「③しばらくだね。」

駅のホームで、旧知の友人と偶然、出会った時のやりとりである。「しばらく」は、長い間会っていない人と再会した時に用いる。辞書形をそのまま言う形式は親しい者どうしのくだけた言い方である。丁寧な言い方では、「しばらくです／でした」「お久しぶりです／でした」のように、丁寧の意を示す「です／でした」を付して用いる。

家族間のあいさつでは、次の例のようにあいさつ語を用いないことがある。

恵子「④お父さん。」

恵子の父「⑤おお。」

父親と娘の駅前での再会の場面である。ここでは、呼びかけと応答が再会の喜びを表現しており、あいさつ語は用いていない。家族間では、特に改まった場合でなければ、あいさつ語を言わずにすまずことが多い。

次の例は、同じ駅前で偶然、会った他人どうしの再会のあいさつである。

正男「⑥お久しぶりです。」

恵子の父「⑦しばらくだね。」

目下の正男は丁寧なあいさつ語を用い、恵子の父親は、娘の友人に対し、くだけた言い方で親しみの気持ちを示している。

別れてから近い日に知人と再会した場合には「先日は失礼しました」「先日はどうも」などの言い方をする。共有する経験を想起し合うことは、対人関係における空白期間を心理的に縮小し、お互を近づける効果がある。「失礼しました」の用法については第26課を参照されたい。

3.2.2. 相手の健康をたずねる時

久しぶりに人と再会した時には、相手の健康をまずたずねる。相手の近親者についても言及することが多い。病氣見舞の際には、健康についてたずねること自体があいさつの機能を果たす。次の例は、久しぶりに再会した友人どうしの例である。

正男「⑧元気だった？」

恵子「⑨ええ。⑩正男さんも？」

正男「⑪うん。」

「しばらく」「お久しぶり」などに続けて、再会の場面でお互いの健康をたずねている。丁寧な言い方では、「お元気ですか／でしたか」「いかがですか」などと言う。「いかがですか」は、相手の仕事や近況をたずねる意味でも使う。丁寧な改まりの応答は「おかげさまで」と言う。

3.2.3. 感謝の意を表す時

感謝の意を表す言い方にも種々のものがあるが、最も一般的な言い方は「ありがとう」である。この映画の中の謝意を表す場面では次のような表現が使われている。

恵子「⑫そこで会って、荷物を持ってもらったの。」

恵子の父（正男に）「⑬それは、どうも。」

⑬は、父親が娘の友人に謝意を表した言葉である。「それは、どうも」は、「それは、どうもありがとう」の下略された言い方。目下の者や親しい友人などに対して軽く言う時に用いる。目上の者に対して、あるいは改まった場で丁重に言う場合には、

正男「⑭送っていただいて、ありがとうございました。」

恵子の父「⑮いや、いや。」

の⑮のように「ありがとうございました」を用いる。「どうも」を前に付ければ、より丁寧な言い方になる。「いや、いや」は相手の発言を打ち消す言葉で、「感謝されるほどのことではない」の意。主に年配の男性が用いるくだけた言い方である。丁重に応答する場合には「どういたしまして」を用い

る。

次の例は、家族間のやりとりである。

正男「⑮はい、おみやげ。」

母「⑯ありがとう。」

母親が子供からみやげをもらった時の感謝の言葉である。「ありがとう」は「ありがたく」の音使で、下に「ございます」の略された形。有難い、世に稀であるの意味から、かたじけない、もったいない、恐れ多いなどの意に使われ、感謝の気持を表す最も一般的なあいさつ語になった。⑮の「ありがとう」は「どうも」だけで応答してもよい場面である。

次の例は、娘恵子が、つき上がった餅を母親のところへ運んだ場面でのやりとりである。

恵子「⑰はい、どうぞ。」

恵子の母「⑱はい、どうも。」

母親の「どうも」には、「どうもごくろうさま」という気持が込められている。感謝というよりは軽いねぎらいの言葉である。「⑲寒かったでしょう」も、仕事を終えて外から戻った者に対するねぎらいの言葉である。

母「⑳ごくろうまさ。」

は、仕事を終わった者に対し、感謝の気持ちを込めて言うねぎらいの言葉。この言葉は、ふつう上位者が下位の者に対して用いる。

3.2.4. 帰宅した時

次の例は、外から自分の家へ帰った時の親子のあいさつである。

正男「㉑ただいま。」

正男の母「㉒ああ、お帰り。」

㉓外は寒いでしょう。」

「ただいま」は、「ただいま帰りました」を下略した形で、外から帰った人が家に居る人、迎える人に対して言う。迎える人は、帰ってきた人に対して「お帰りなさい」と言う。「お帰り」は、目上の者が目下の者に言う言い

方。丁寧な言い方では「お帰りなさいませ」となる。「外は寒いでしょう」は、寒い時期に外から帰った人に言うねぎらいの言葉。

次の例は、外から帰った妻とそれを迎える夫のやりとりである。

母「㉘ただいま。」

父「㉙ああ、お帰り。」

簡単なあいさつの中に、夫婦の情愛が感じられるやりとりである。

3.2.5. 別れの時

別れのあいさつにも種々の言い方がある。一般的な別離に用いられるのは「さようなら」である。次の例は、親しい友人どうしの別れのあいさつである。

正男「㉚じゃ、あしたの朝。」

恵子「㉛待っているわ。」

正男「㉜うん。」

「㉝じゃ。」

恵子「㉞さようなら。」

「さようなら」は、短く「さよなら」とも言う。「さようならば（それならば）」から生じた言葉で、（それでは、これで失礼する、また会う日までお元気で）というほどの意味が略されたものと思われる。これは、改まった別離の時に多く使う言い方で、親しい者どうしのくだけた日常会話では、「じゃあ、また」「じゃあね」「じゃ」などがよく用いられる。年少者や幼児などは、英語からきた「バイバイ（bye-bye）」を使うことがある。

このほか、別れのあいさつ語としては、相手や状況により種々の言い方が用いられる。

上位者のもとから退出する際や辞去を乞う時には、「では、失礼します」「失礼しました」「お邪魔しました」（第26課参照）などがよく用いられる。卒業式や出立の場合など、世話になった人に対しては感謝の気持ちを込めて、「どうもお世話様でした」「お世話になりました」などと言う。送る

人は、「お元気で」「ごきげんよう」などと言う。退院の場合や遠方の地に赴く人、夜分帰宅する人などに対しては、「お気をつけて」、病人のもとを去る時には、「お大事に」などが使われる。

家から出かける時、旅立ち等の場合には、出かける人は送る人に対して「行ってまいります」「行ってきます」とあいさつし、送る人は「行ってらっしゃい」と言って送り出す。

3.2.6. あいさつ語の機能

日本語は、多様なあいさつ表現に富むと言われる。あいさつ語には、相手、場面、状況に応じた種々の言い方があるが、日本語ほど多様な表現を有しない言語もある。そのような言語では、日本語のあいさつ語に対応する言い方がないのである。また、同じような表現があったとしても、それぞれ用法が異なる場合も多い。

例えば、タイ語では、「おはよう」も「こんにちは」も「こんばんは」も「サワディー」という同じ言葉一つです。この言葉は、ふつう目下の者からまず発話するのが通例だという。用法として発話順序が関係するのである。インドネシア語では、別離のあいさつ「さようなら」に対応する表現として、「スラマツ・ジャラン (Selamat jalan)」と「スラマツ・ティンガル (Selamat tinggal)」の二つの言い方がある。前者は、居残る人が立去る人に言うあいさつで、「無事な歩き」の意である。後者は、立去る人が居残る人に言うあいさつで、「無事な居留」の意である。中国語では、人と会った時のあいさつは、外国人などに対する改まった場合には「ニーハオ (你好)」を用いるが、親しい者同士のくだけた言い方では、「チファンラマ (吃飯了鳴、もう食べましたかの意)」という表現を用いることが多いと言う。

あいさつ語は、一般的に言えば実質的な伝達内容は含まず、相手に対する話し手の気持ち、態度を表明することに意味がある。コミュニケーションの開始、終了、安全の祈願、希望、謝意、喜び、悲しみ、詫言等、広い意味での言表態度 (modus) の側面に関係する。話し手の気持ちや態度を定型化さ

れた形式によって表示する点にその特徴がある。

社会関係論の立場からは、あいさつの機能を、社会関係を作る創出のあいさつ（初対面のあいさつ等）、それを持続させる維持のあいさつ（再会のあいさつ等）、相手の変化を認める承認のあいさつ（慶弔のあいさつ等）、不均衡を是正する補償のあいさつ（お礼・詫びのあいさつ等）の四つに分類できると言う。金田一秀穂（1986）は、あいさつの機能を、時間的空間的な境界上にあらわれる儀礼的なものとしてとらえ、比較文化論の立場からこれを分析しようとしている。いずれにせよ、あいさつ表現が、コミュニケーションを行うに際し、重要な機能を果たしていることにはまちがいない。以下に、日常会話で用いる主なあいさつ語を一覧にしておく。

日常会話で用いる主なあいさつ語

場面・状況	表 現	備 考
1. 初対面 再 会	はじめまして／お初にお目にかかります どうぞよろしく、こちらこそ 今後ともよろしく 先日は失礼（いた）しました しばらくでした／お久しぶりです どちらへ ちょっとそこまで	初対面の相手に、名乗りの前後に 交誼の依頼 別れ際などに 近い日に再会した時 長い間会わなかった時 路上や街頭での偶然の出会いに、親しい間柄で 「どちらへ」の返事として
2. その日はじめて 顔を合わせた時 朝 日中・昼前～夕 刻 夕方～夜分	おはよう（ございます） こんにちは こんばんは	家族間でも家族外の人に対しても 家族以外の人に "
3. 外出・帰宅 家を出る時送り 出し 出立	行って（い）らっしゃい 行ってまいります	送る人が出かける人に 改まり・旅立ち等、出かける人が

帰った時	行ってきます ただいま（帰りました） お帰り（なさい）	普通、旅立ち等、出かける人が 帰ってきた人が迎える人に 迎える人が帰ってきた人に
4. 訪問・歓迎 他家を訪ねる 来客を迎える 家に入る・席に着く	ごめんください おはようございます／こんにち は／こんばんは いらっしゃいませ よくいらっしゃいました ようこそ（いらっしゃいませ ／ました） おじゃま（いた）します／失 礼（いた）します	戸口で訪問者が 戸口でも会ってから も 店員等の接客用語でも 改まり
5. 別れ 就寝	さよ（う）なら （では）ごめんください／失 礼（いた）します 失礼／おじゃま（いた）しま した じゃあ、また じゃあね バイバイ お元気で ごきげんよう お気をつけて お休み（なさい）	一般的別離 辞去を乞う 退出の際、非礼を詫げる気持 で 親しい間柄で、近く再会でき る人に 親しいよりくだけた言い方、 若い人に多い 年少者・幼児 しばらく会えない人に、旅立 ちの人等に 改まり・氣どった感じ、旅立 ちの人にも 出かける人・旅立ちの人等に、 夜分帰る人にも 夜分遅く別れる時にも
6. 感謝・御礼・ねぎらい	（どうも）ありがとう（ござ いました） どういたしまして （どうも）お世話さまでした （ ）お世話になりました お疲れさま（でした） ご苦労さま（です／でした）	一般的謝意 謝意に対する答礼 卒業・退院・出立・別れ等の 際に 仕事が終わった時、職場を退 出する人に 仕事が終わった時、上位者が 下位の者に

7. 飲食 食前 食後	いただきます ごちそうさま（でした） お粗末さま（でした）	飲食する人が提供者に、自宅でも 飲食した人が提供者に、自宅でも 提供者が客に
8. 詫び	（どうも）すみません／すいません（でした） 申し訳あり（ごさい）ません（でした） ごめん（なさい）ね 失礼（いた）します 失礼（いた）しました	許しを乞う、過失・非礼を詫びる " 改まり、丁重 親しい間柄で 行為の前に 行為の後に
9. 健康・病気	お元気ですか いかがですか お大事に	再会の時に、相手の近親者について 改まり、生活・仕事の様子にも 病気の人に、見舞いの際など
10. 慶弔 祝賀 慰め 死亡	おめでとう（ございます／ました） 残念です（でした）ね お気の毒でした ご愁傷さまでした なんとも申し上げようもございません	新年・誕生・入学・合格・結婚・成功など 失意の人に、同情・哀惜の気持ちで 不幸な立場の人に、哀惜の気持ちで 物故者の家族・親族に対して、小聲で " "

3.3. 男ことばの問題(2)

日本語では、男性の用いる表現と女性の用いる表現の差が大きい。最近の傾向としては、若い男女の間ではこの開きが縮まってきているとも言われるが、まだ顕著な差異が随所に見られる。男性の用いる表現を一般的・中立的表現と規定すれば、「女ことば」をその変位として論ずることになるだろうが、ここでは、この映画の中に提出された年配の男性、恵子の父親と正男の父親の言葉づかいを「男ことば」の例として取りあげることにする。

性差による話法の違いは、表現される素材的な事柄に対応する側面にも若干見られるが、より顕著にそれが現れるのは、言語主体の場面に対応する側面においてである。話し手の用いる自称詞「ぼく／おれ」、相手に対する呼びかけ語「君／おまえ」「おい／こら」など、応答語「ああ／おお」など、また文末表現・終助詞の用法には典型的な例が多く見られる。「～だね」「～だい?」「～かい?」「～してやるよ」「～してくれ」などもこの類である。この映画に提出されたいくつかの父親の発話について、母親ならば、同一場面でどのように表現するか、対比しながら見てみよう。

次の例は、列車で帰省した娘とその友人と駅頭で会った父親の発話である。

恵子「⑮お父さん。」

父「⑯おお。」

⑰正男君もこの列車だったのか。」

「おお」は、久しぶりに再会した娘からの呼びかけに対する応答。男性が主に用い、このような場面で女性は用いない。意外なことに気づいたり、驚きの気持を表す場合にも用いるが、母親なら「あら」とか「まあ」とかの語を用いる。「～だったのか」は、確認、納得の意を表す言い方で、男性が主に用いる。母親の発言なら、「正男さんもこの列車だったの」となろう。目下または同位の者に対する敬称「～君」も主に男性が用いるが、最近では若い女性の間でも使われるようである。

父「⑳しばらくだね。」

は、男性的文末表現。母親なら「しばらくだわね」のように、終助詞「わ」を添えて言うのがふつう。次の例は、恵子の父親が正男に対して発した質問である。

父「㉑正月は、いつまでこっちにいられるんだい。」

文末の「いられるんだい」は、男性の用いる文末表現。母親なら「いられるの／いられるのかしら」と言う。

恵子「㉒お父さん、あした、お餅つきでしょう。」

恵子の父「㉓ああ。」

②正男君、今年も手伝ってくれるかい。」

上例の応答語「③ああ」、②の文末表現「くれるかい」は男ことば。母親なら「ねえ、正男さん、今年も手伝ってくれる／くださる？」となる。

正男「④何時から始めますか。」

恵子の父「⑤今年は、9時ごろからにしようよ。」

上例の⑤の文末表現も男性的な言い方である。女性も、親しい者どうしの内輪の会話なら飾り気のない物言いとしてこの表現を使用できるが、この映画の場面で母親が発言するとすれば、「しましょう／しませんか」と丁寧な表現を用いるだろう。

正男「⑥送っていただいて、ありがとうございました。」

恵子の父「⑦いや、いや。」

⑧あした、9時に来てくれるね。」

上例の「いや、いや」は男ことば。母親なら「いいえ」を用いる。「来てくれるね」も母親なら「来てくれるわね」と終助詞「わ」を付して言う。あるいは、「来てくださる？」と待遇度上位の動詞を用いた判定要求の質問形式で言うだろう。

次の例は、父親が自分の息子に対して言う発話である。

恵子の父「⑨明夫、それを持っていてやるよ。」

この場合、母親なら息子に対してであっても、「持っていてあげるわ」と待遇度上位の動詞を使うであろう。ワキの聞き手に他人の正男がいるので、表現に対する美化意識が働くためである。表現に上品さを保持しようとする気持は特に女性に強い。

恵子の父「⑩こんどは、わたしが代わろう。」

上例の発話場面で、恵子の父は自称詞として「わたし」を用いている。これは、娘の友人正男に対する発話だからである。家族の者に対してなら「お父さんが」とか、「わし（おれ、ぼく）が」とか言うところである。「わたし」は改まった丁寧な場面では、「わたくし」となる。女性は、くだけた言い方として「あたし」と言うことがある。幼い女兒で「あたい」と言う者も

いる。文末表現「代わろう」は男ことば。母親なら「代わるわ」あるいは「代わりましょう」と丁寧に言う。

次の例は、正男の父親が、息子に作業の手助けを求める場面である。

正男の父「㉔そのひもを取ってくれ。」

正男「㉕うん。」

正男の父「㉖ここを押さえてくれないか。」

㉔㉕の文末表現も男ことば。目下の家族に対する発話であっても、女性が動詞の命令形をそのままの形で用いることは稀である。母親なら、「取ってくれない？」と上昇調のイントネーションで相手の意向を問う言い方になる。あるいは、女性がよく用いる終助詞「かしら」を付して「取ってくれないかしら」のように言う。

次の例は、妻の呼びかけに対する夫の応答である。

正男の母「㉗お父さん、お茶が入りましたよ。」

正男の父「㉘ああ、もうすぐ終わりだ。」

㉘は、男性の用いる表現。この会話で、夫と妻の立場を逆に入れかえれば、㉗㉘の発話は、

父㉗「お母さん、お茶が入ったよ。」

母㉘「ああ、そう。もうすぐ終わりよ。」

となろう。応答語「ああ」だけを単独で女性が用いることは少ない。文末表現「終わりだ」も男性的言い方である。

以上見てきたように、男性の発話は女性の発話に比べ、直接的な表現を用いることが多く、女性は婉曲的な柔かい感じを与える表現を使う傾向が強い。なお、授受表現に見られる男女の言葉づかいの差異については第26課の解説を参照されたい。

4. 練習問題

4.1. 導入と練習の方法

事物の授受に関する本動詞「やる、もらう、くれる」等の導入と練習の方法、練習問題例は、第26課で解説した。補助動詞を用いた導入と練習は、本動詞の用法を学習者が完全に理解し、十分に定着してから行うべきである。

補助動詞の導入と練習の方法は、本動詞の場合と同様、現実の場面を利用し、教師と学習者、学習者どうしの間で実際に動作を行い、そのやりとりを則して発話させるのが効果的である。手順としては、まず、「～てあげる」「～てもらう」の基本的用法から導入・練習を行い、それが定着してから「～てくれる」の用法を提示すると良い。

例えば、学習者Bを指名し、学習者Aに対して「この漢字が読めません。読み方を教えてください」と言わせる。Aは、それに対して答える。Bに「ありがとうございました」と礼を言わせ、「AさんはBさんに漢字の読み方を教えてあげました」「BさんはAさんに漢字の読み方を教えてもらいました」の表現を与える。同様のやりとりを順次やらせ、「～てあげる」「～てもらう」の用法を導入する。本動詞の場合と同様のやり方で、「～てくれる」の導入も行う。取り上げる例は、その場で理解が容易な既習語彙を用いることが肝要である。相手に利益や恩恵を与える意味に結び付く動作動詞「教える」「手伝う」「荷物を持つ」「消しゴムを貸す」などの語句を用いると理解が容易であろう。次の段階で、やりとりの相手を、教師対学生、大使対学生などに設定し、「～てさしあげる」「～ていただく」「～てくださる」の用法を同様の手順で導入し、練習する。「～てやる」の用法は、別に扱うほうが指導はしやすい。手順、手法を誤ると混乱をまねくので、一つずつの表現を確実に定着させ、スムーズな発話ができるようになるまで次の段階に進まぬように留意すべきである。口頭による導入、練習が済んでから、文字表記による提示を行い、練習問題を与えるのが効果的である。

練習問題例の若干を以下に示す。

4.2. 「～てあげる」「～てもらう」「～てくれる」の基本的練習問題例

- (1) 次の文の（ ）の中に「～てあげる」「～てもらう」「～てくれる」の中から適当なものを選んで入れなさい。

山田さんは英語がわからなくて困っています。

ジョンさんは山田さんに英語を教え（ ）ました。

山田さんはジョンさんに英語を教え（ ）ました。

ジョンさんはわたしに英語を教え（ ）ました。

- (2) 次の文を〔例〕にならって言いかえなさい。

〔例〕 ジョンさんは山田さんに英語を教えてあげました。

→山田さんはジョンさんに英語を教えてもらいました。

- ① 中村さんはジョンさんに辞書を貸してあげました。
- ② 山田さんはわたしたちをホテルまで案内してくれました。
- ③ わたしはジョンさんの荷物を持ってあげました。
- ④ わたしは山田さんに荷物を持ってもらいました。

4.3. 映画の場面を使っての練習例

- (1) 次の会話の（ ）の中の動詞に、「やり・もらい」の動詞を付けて言いなさい。役割を決めて会話の練習をしなさい。会話をしている二人はどんな関係ですか。

- ① 恵子さんと正男さんの会話（場面Ⅰ，②～⑤）

恵子「あら，正男さん，しばらく。」

正男「しばらくだね。それ，重そうだね。（持つ）よ。」

- ② 正男と恵子の会話（場面Ⅱ－１，⑫～⑬）

正男「恵子さん、バスで帰るの？」

恵子「父が迎えに（来る）の。」

⑧ 正男と母の会話（場面Ⅴ－２，⑤⑤～⑤⑨）

正男「駅で恵子さんに会ってね。」

母「あら、そう。」

⑨ 正男「恵子さんのお父さんに車で（送っ）たよ。」

母「そう。（送っ）たの。」

(2) 次の言い方は、親しい人に対するくだけた言い方です。（正男）の部分
を（先生）に変えて、下線の言葉を丁寧な言い方になおしなさい。

① （場面Ⅱ－２，②①）

恵子「そこで（正男さんに）会って、荷物を持ってらったの。」

② （場面Ⅲ－２，③⑤～③⑦）

恵子「お父さん、あした、お餅つきでしょう。」

父「ああ。（正男君）、今年も、手伝てくれるかい。」

③ （場面Ⅳ，④④）

恵子の父（正男に）「あした、9時に来てくれるね。」

④ （場面Ⅵ－１，⑥⑧）

恵子の父「恵子、（正男君）にてぬぐいを持ってきてあげてなさい。」

以上、若干の問題例を示したが、練習は学習者の理解度、定着度に合わせ
適当な課題を与えることが大切である。

5. 参考文献 (第26巻, 第27巻共通)

- 林 八龍 (イム・パルヨン), 1980, 「日本語・韓国語の授給表現の対照研究」『日本語教育』40号
- 上野田鶴子, 1978, 「授受動詞と敬語」『日本語教育』35号
- 大江三郎, 1975, 「日本語の授受動詞『やる』『くれる』『もらう』, 『日英語の比較研究—主観性をめぐって』, 南雲堂
- 大曾美恵子, 1983, 「授動詞文とニ名詞句」, 『日本語教育』50号
- 岡野喜美子, 1972, 「授給表現の扱い方」, 『講座日本語教育』第8分冊
- 奥津敬一郎・徐昌華, 1982, 「『～てもらう』とそれに対応する中国語表現—“请”を中心に—」, 『日本語教育』46号
- 奥津敬一郎, 1983, 「授受表現の対照研究—日・朝・中・英の比較—」, 『日本語学』, 第2巻第4号
- 久野 暉, 1978, 『談話の文法』, 大修館書店
- 江田すみれ, 1983, 「『てやる・てくれる・てもらう』とタイ語の表現—hàiの用法に注目して—」, 『日本語教育』49号
- 国立国語研究所, 1972, 『動詞の意味用法の記述的研究』, 秀英出版
- , 1960, 『話しことばの文型(1)—対話資料による研究—』, 秀英出版
- , 1963, 『話しことばの文型(2)—独話資料による研究—』, 秀英出版
- 佐久間 鼎, 1983, 『現代日本語の表現と語法<増補版>』, くろしお出版
- 柴谷方良, 1978, 『日本語の分析』, 大修館書店
- 鈴木重幸, 1972, 『日本語文法形態論』, 麥書房
- 鈴木丹士郎, 1972, 「動詞の問題点」, 『品詞別日本文法講座3 動詞』, 明治書院
- 辻村敏樹, 1967, 『現代の敬語』, 共文社
- , 1987, 『敬語の史的研究』, 東京堂出版
- 寺村秀夫, 1982, 『日本語のシンタクスと意味』第1巻, くろしお出版

豊田豊子, 1974, 「補助動詞『やる・くれる・もらう』について」, 『日本語
学校論集』1号

正宗美根子, 1978, 「日本語の待遇表現の一考察」, 『Annual Reports』Vol. 3

三上 章, 1972, 『現代語法序説』, くろしお出版

水谷信子, 1985, 『日英比較話しことばの文法』, くろしお出版

森田良行, 1977, 『基礎日本語』, 角川書店

———, 1981, 『日本語の発想』, 冬樹社

山下秀雄, 1975, 「『場』の設定(その2)」, 『日本語教育研究』第11号

———, 1986, 『日本のことばとところ』, 講談社

<あいさつ語・呼びかけ語関係>

奥山益朗, 1970, 『あいさつ語辞典』, 東京堂出版

金田一秀穂, 1986, 「「会話論ノート1・『あいさつ』考」, 『月刊言語』第15
巻第12号

鈴木孝夫, 1973, 『ことばと文化』, 岩波書店

水谷 修, 1979, 『日本語の生態』, 創拓社

南不二男, 1974, 『現代日本語の構造』, 大修館書店

『言語生活』特集: 第196号「あいさつ」(1968.1), 第348号「きまり文句」
(1980.12), 第363号「わかれのことば」(1982.3), 筑摩書房

『月刊言語』特集: 第10巻第4号「あいさつの言語学」(1981.4), 大修館書店

資 料

資料1. 使用語彙一覧

これは、この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文同様、教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
 - 2.—1. 接頭語「お」「ご」や、接尾語「じ（時）」等は、見出し語として取り上げている。ただし、「おちゃ（お茶）」「おみやげ」等は、そのまま見出し語に立っている。
 - 2.—2. 数詞は、助数詞と切り離して見出し語に立っている。
 - 2.—3. 動詞は、終止形を見出し語にしている。サ変複合動詞は、「する」を切り離して二語扱いにしている。
 - 2.—4. 「いい」「よい」は同一見出し語のもとに取り扱っている。
 - 2.—5. 形容動詞は、「____な」の形を見出し語にしている。
 - 2.—6. 「だ」「です」等に前接する「ん」は、一語扱いにして見出し語にしている。
 - 2.—7. 「ごくろうさま」等、慣用的表現として扱ったものは、見出し語にしている。
 - 2.—8. 助動詞「た」や接続助詞「て」は、ここでは動詞部分に含め見出し語にしていない。
 - 2.—9. 「う」「よう」は同一見出し語のもとに取り扱っている。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつき等に基づいて下位分類する場合には、(1)(2)……のようにした。
 - 3.—1. 動詞は、本動詞としての用法と補助動詞としての用法で大きく二分した。本動詞の場合は「ます」形であるか、「——て」等の形であるかで下位分類し、補助動詞が違えばさらに下位分類してある。ま

た常体での言い方は、一語扱いにして別の分類にした。

3.—2. 「だ」「です」は、それに伴う終助詞の種類、また「だ」「です」に「ん」が前接するかどうか等により下位分類してある。

3.—3. 助詞「が」「に」「の」等は、その意味・用法によって下位分類してある。

4. 「ます」については、文例の列挙を省略し、文番号だけを示した。

5. 使用文例の文頭には、①②……の数字がつけてある。これはシナリオでの文通し番号であり、この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内では、この順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合にも、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については通し番号を横に並べ、引用を一回ですませた。

6. 見出し語の横には〔 〕で常用漢字の範囲内で漢字を示し、またその横には（ ）で語の使用回数を示した。

あ(2)

⑧⑧ あ、そう。

⑧⑨ あ、やくそくしたよ。

あーあ(1)

⑨⑨ あーあ。

ああ(あー)(7)

(1)⑧⑥, ⑨②, ⑨⑥ ああ。

⑨②, ⑨⑥ ああ、おかえり。

⑨⑧ ああ、もうすぐ おわりだ。

(2)⑧⑦ あー、あつい。

あう〔会う〕(2)

②① そこで あって、にもつを もって もらったの。

⑤⑤ えきで けいこさんに あってね。

あきお〔明夫〕(3)

(1)⑦⑦ あっ、あきおにも もって きて やりなさい。

(2)⑦⑦ はい、あきお。

⑦⑧ あきお、それを もって いて やるよ。

あげる(5)

(1)⑥⑨ けいこ、まさおくん に てぬぐいを もって きて あげなさい。

(2)⑤⑤ もって あげるよ。

⑨⑥ けいこ、かわって あげるわ。

(3)⑥② まさお、ことしも、おもちつきを てつだって あげるんでしょう。

(4)②⑥ おくって あげよう。

あさ〔朝〕(1)

④⑥ じゃ、あしたの あさ。

あした(3)

③⑤ おとうさん、あした、おもちつきでしょう。

④④ あした、くじに きて くれるね。

④⑥ じゃ、あしたの あさ。

あっ(3)

①④ あっ、きたわ。

⑦⑩ あっ、あきおにも もって きて やりなさい。

⑦⑤ あっ。

あつい〔暑い〕(1)

⑥⑦ あー、あつい。

あら(2)

② あら、まさおさん、しばらく。

⑤⑥ あら、そう。

ありがとう(2)

④② おくって いただいて、ありがとうございました。

⑥⑤ ありがとう。

い(1)

③① しょうがつは、いつまで こっちに いられるんだい。

いい(よい〔良い〕)(3)

(1)②⑦ いいんですか。

②④ ゆっくり できて いいね。

(2)⑥① それは、よかったわね。

いいえ(1)

⑧⑤ いいえ。

いく〔行く〕(1)

④① じゃあ、くじ すこし まえに いきます。

いただく(2)

(1)②⑨ それじゃあ、のせて いただきます。

(2)④② おくって いただいて、ありがとうございました。

いつか〔五日〕(1)

③② いつかまで います。

いつ(1)

⑧1 しょうがつは、いつまで こっちに いられるんだい。

いや(2)

④8 いや、いや。

④9 いや、いや。

いる(4)

(1)②2 いつかまで います。

⑧1 しょうがつは、いつまで こっちに いられるんだい。

(2)⑦8 あきお、それを もって いて やるよ。

(3)④7 まって いるわ。

う(よう)(4)

(1)②2 こんどは、わたしが かわろう。

⑧1 てつだおうか。

(2)②6 おくって あげよう。

④0 ことしは、くじごろからに しょうよ。

ううん(1)

⑤4 ううん。

うん(6)

⑦, ①①, ④8, ⑥0, ⑦9, ⑨4 うん。

ええ(3)

⑨, ①8, ③8 ええ。

えき〔駅〕(1)

⑤5 えきで けいこさんに あってね。

えっ(1)

②5 えっ。

お(3)

①9 おひさしぶりです。

②5 おとうさん、あした、おもちつきでしょう。

おわり〔終わり〕(2)

⑨⑩ これで **おわり**だよ。

⑨⑧ ああ、もうすぐ **おわり**だ。

おわる〔終わる〕(1)

⑩⑨ まさおが てつだって くれたので、はやく **おわった**よ。

か(5)

①⑦ まさおくんも この れっしゃだったのか。

②⑦ いいんですか。

③⑨ なんじから はじめますか。

④① てつだおうか。

⑤⑤ ここを おさえて くないか。

が(7)

(1)⑥ じゃあ、その にもつ、わたしが もつわ。

①③ ちちが むかえに きて くれるの。

②② こんどは、わたしが かわろう。

③④ まさおさんが てつだって くれたので、たすかったわ。

④① まさおが てつだって くれたので、はやく **おわった**よ。

(2)⑦⑦ おとうさん、おちやが はいりましたよ。

⑧② これです、おおゆきが ふっても だいじょうぶね。

かい(1)

③⑦ まさおくん、ことしも、てつだって くれるかい。

かえる〔帰る〕(1)

①② けいこさん、バスで **かえる**の？

から(2)

③⑨ なんじから はじめますか。

④④ ことしは、くじごろからに しようよ。

かわる〔代わる〕(2)

(1)⑧⑧ けいこ、**かわって** あげるわ。

(2)②② こんどは、わたしが **かわろう**。

く〔九〕(3)

④① ことしは **くじ**ごろからに **しよう**よ。

④① じゃあ、**くじ** **すこし** **まえ**に **いきます**。

④④ あした、**くじ**に **きて** **くれる**ね。

くださる(1)

⑤⑨ おくって **くださった**の。

くる〔来る〕(5)

(1)⑥⑧ けいこ、まさおくん **てぬぐい**を **もって** **きて** **あげ**なさい。

⑦⑩ あっ、あきおにも **もって** **きて** **やり**なさい。

(2)⑬ ちちが **むかえ**に **きて** **くれる**の。

④④ あした、**くじ**に **きて** **くれる**ね。

(3)⑭ あっ、きたわ。

くるま〔車〕(1)

⑤⑦ けいこさんの **おとうさん**に **くる**まで **おく**って **もら**ったよ。

くれる(7)

(1)⑬ ちちが **むかえ**に **きて** **くれる**の。

⑧⑦ まさおくん、ことしも、**てつだ**って **くれる**かい。

④④ あした、**くじ**に **きて** **くれる**ね。

(2)⑥④ まさおさんが **てつだ**って **くれた**ので、**たす**かったわ。

⑩⑩ まさおが **てつだ**って **くれた**ので、**はやく** **おわ**ったよ。

(3)⑨③ その **ひも**を **と**って **くれ**。

⑨⑤ ここをおさえて **くれ**ないか。

くん〔君〕(4)

⑪⑦ まさおくんも この **れっしや**だったのか。

②④ さっ、まさおくんも **どうぞ**。

⑧⑦ まさおくん、ことしも、**てつだ**って **くれる**かい。

⑧⑧ けいこ、まさおくん **てぬぐい**を **もって** **きて** **あげ**なさい。

けいこ〔恵子〕(6)

(1) ㉕ えきで けいこさんに あってね。

㉖ けいこさんの おとうさんに くるまで おくって もらったよ。

(2) ① けいこさん。

② けいこさん、バスで かえるの？

③ けいこ、まさおくん に てぬぐいを もって きて あげなさい。

④ けいこ、かわって あげるわ。

げんきな〔元気な〕(1)

⑤ げんきだった？

ごくろうさま(1)

⑥ ごくろうさま。

ここ(1)

⑦ ここを おさえて くないか。

ございました(1)

⑧ おくって いただいて、ありがとうございます。

こっち(1)

⑨ しょうがつは、いつまで こっちに いられるんだい。

ことし〔今年〕(3)

⑩ まさおくん、ことしも、てつだって くれるかい。

⑪ ことしは、くじごろからに しょうよ。

⑫ まさお、ことしも、おもちつきを てつだって あげるんでしょう。

この(1)

⑬ まさおくんも この れっしゃだったのか。

これで(2)

⑭ これで おわりだよ。

⑮ これで、おおゆきが ふっても だいじょうぶね。

ころ(1)

⑯ ことしは、くじごろからに しょうよ。

こんど〔今度〕(1)

⑧⑨ こんどは、わたしが かわろう。

さっ(1)

⑨⑩ さっ、まさおくんも どうぞ。

さむい〔寒い〕(2)

⑤⑨ そとは、さむいでしょう。

⑩⑩ さむかったでしょう。

さようなら(1)

⑤⑩ さようなら。

さん(8)

① けいこさん。

② あら、まさおさん、しばらく。

⑩⑩ まさおさんも？

⑫⑫ けいこさん、バスで かえるの？

⑤⑤ えきで けいこさんに あってね。

⑤⑦ けいこさんの おとうさんに くるまで おくって もらったよ。

⑦④ はい、まさおさん。

⑧④ まさおさんが てつだって くれたので、たすかったわ。

じ〔時〕(4)

⑧⑨ なんじから はじめますか。

④⑩ ことしは、くじごろからに しようよ。

④① じゃあ、くじ すこし まえに いきます。

④④ あした、くじに きて くれるね。

しばらく(3)

② あら、まさおさん、しばらく。

③, ②⑩ しばらくだね。

じゃ(5)

②③, ②④, ④⑨ じゃ。

④⑥ じゃ、あしたの あさ。

⑧⑨ じゃ、おねがいします。

じゃあ(3)

⑥ じゃあ、その にもつ、わたしが もつわ。

④① じゃあ、くじ すこし まえに いきます。

⑧⑨ じゃあ。

しょうがつ〔正月〕(1)

⑧① しょうがつは、いつまで こっちに いられるんだい。

すこし〔少し〕(1)

④① じゃあ、くじ すこし まえに いきます。

する(3)

(1)⑧⑨ じゃ、おねがいします。

(2)⑥⑨ あ、やくそくしたよ。

(3)④⑩ ことしは、くじごろからに しようよ。

そう(4)

⑧⑨ あ、そう。

⑤⑥ あら、そう。

⑤⑧、⑧⑦ そう。

そうだ(1)

④ それ、おもそうだね。

そこ(2)

②① そこで あって、にもつを もって もらったの。

⑧⑨ そのの ひもを とって くれ。

そと〔外〕(1)

⑤⑨ そとは、さむいでしょう。

その(1)

⑧ じゃあ、その にもつ、わたしが もつわ。

それ(5)

④ それ、おもそうだね。

②② それは、どうも。

⑥① それは、よかったわね。

⑦③ あきお、それを もって いて やるよ。

⑧① それ。

それじゃあ(1)

②⑨ それじゃあ、のせて いただきます。

だ(5)

(1)③、②⑩ しばらくだね。

⑨⑩ これで おわりだよ。

⑨⑧ ああ、もうすぐ おわりだ。

(2)③① しょうがつは、いつまで こっちに いられるんだい。

だいじょうぶ〔大丈夫〕(1)

⑩② これで、おおゆきが ふっても だいじょうぶね。

たすかる〔助かる〕(1)

③④ まさおさんが てつだって くれたので、たすかったわ。

ただいま(2)

⑤①、⑧⑨ ただいま。

だった(1)

⑦⑦ まさおくんも この れっしやだったのか。

ちち〔父〕(1)

③③ ちちが むかえに きて くれるの。

で(4)

(1)②① そこで あって、にもつを もって もらったの。

⑤⑤ えきで けいこさんに あってね。

(2)②② けいこさん、バスで かえるの？

⑦⑦ けいこさんの おとうさんに くるまで おくって もらったよ。

できる(1)

③④ ゆっくり できて いいね。

でしょう(4)

(1)③⑤ おとうさん、あした、おもちつきでしょう。

⑤③ そとは、さむいでしょう。

⑩⑩ さむかったでしょう。

(2)⑥② まさお、ことしも、おもちつきを てつだって あげるんでしょう。

です(2)

①⑨ おひさしぶりです。

②⑦ いいんですか。

てつだう〔手伝う〕(5)

(1)③⑦ まさおくん、ことしも、てつだって くれるかい。

⑥② まさお、ことしも、おもちつきを てつだって あげるんでしょう。

④④ まさおさんが てつだって くれたので、たすかったわ。

⑩① まさおが てつだって くれたので、はやく おわったよ。

(2)⑨① てつだおうか。

てぬぐい(1)

⑥⑧ けいこ、まさおくんに てぬぐいを もって きて あげなさい。

ても(1)

⑩② これで、おおゆきが ふっても だいじょうぶね。

どうぞ(3)

②④ さっ、まさおくんも どうぞ。

⑥③ どうぞ。

⑦① はい、どうぞ。

どうも(2)

②② それは、どうも。

⑦② はい、どうも。

とる〔取る〕(1)

⑨③ そのひもを とって くれ。

ない(1)

⑨⑤ ここを おさえて くないか。

なさい(2)

⑨⑧ けいこ、まさおくん に てぬぐいを もって きて あげなさい。

⑦⑩ あっ、あきおにも もって きて やりなさい。

なん〔何〕(1)

⑨⑨ なんじから はじめますか。

に(9)

(1)⑨① しょうがつは、いつまで こっちに いられるんだい。

(2)④⑩ ことしは、くじごろからに しようよ。

④① じゃあ、くじ すこし まえに いきます。

④④ あした、くじに きて くれるね。

(3)⑤⑤ えきで けいこさんに あってね。

(4)⑬③ ちちが むかえに きて くれるの。

(5)⑥⑦ けいこさんの おとうさんに くるまで おくって もらったよ。

(6)⑧⑧ けいこ、まさおくん に てぬぐいを もって きて あげなさい。

⑦⑩ あっ、あきおにも もって きて やりなさい。

にもつ〔荷物〕(2)

⑧⑥ じゃあ、その にもつ、わたしが もつわ。

⑧② そこで あって、にもつを もって もらったの。

ね(8)

③③、②⑩ しばらくだね。

④④ それ、おもそうだね。

⑧④ ゆっくり できて いいね。

④④ あした、くじに きて くれるね。

⑤⑤ えきで けいこさんに あってね。

⑥① それは、よかったわね。

⑩② これで、おおゆきが ふつても だいじょうぶね。

の(8)

(1)④⑥ じゃ、あしたの あさ。

⑤⑦ けいこさんの おとうさんに くるまで おくって もらったよ。

⑧⑨ その ひもを とって くれ。

(2)⑫ けいこさん、バスで かえるの？

⑬⑭ ちちが むかえに きて くれるの。

⑮⑯ そこで あって、にもつを もって もらったの。

⑰⑱ おくって くださったの。

(3)⑲ まさおくんも この れっしゃだったのか。

のせる〔乗せる〕(1)

⑳ それじゃあ、のせて いただきます。

ので(2)

㉑㉒ まさおさんが てつだって くれたので、たすかったわ。

㉓㉔ まさおが てつだって くれたので、はやく おわったよ。

は(6)

㉕㉖ それは、どうも。

㉗㉘ しょうがつは、いつまで こっちに いられるんだい。

㉙㉚ ことしは、くじごろからに しょうよ。

㉛㉜ そとは、さむいでしょう。

㉝㉞ それは、よかったわね。

㉟㊱ こんどは、わたしが かわろう。

はい(9)

(1)④⑤, ⑥⑨, ⑦⑩ はい。

⑪⑫ はい、どうも。

(2)⑬ はい、おみやげ。

⑭⑮ はい、おちゃ。

⑯⑰ はい、どうぞ。

⑱㉑ はい、まさおさん。

⑦⑥ はい、あきお。

はいる〔入る〕(1)

⑦⑦ おとうさん、おちやが はいりましたよ。

はじめる〔始める〕(1)

⑦⑧ なんじから はじめますか。

バス(1)

⑦⑨ けいこさん、バスで かえるの？

はやい〔早い〕(1)

⑦⑩ まさおが てつだって くれたので、はやく おわったよ。

ひさしぶり〔久しぶり〕(1)

⑦⑪ おひさしぶりです。

ひも(1)

⑦⑫ そのひもを とって くれ。

ふる〔降る〕(1)

⑦⑬ これで、おおゆきが ふっても だいじょうぶね。

まえ〔前〕(1)

⑦⑭ じゃあ、くじ すこし まえに いきます。

まさお〔正男〕(10)

(1)⑩ まさおさんも？

⑦⑰ まさおくんも この れっしゃだったのか。

⑦⑱ さっ、まさおくんも どうぞ。

⑦㉑ けいこ、まさおくん に てぬぐいを もって きて あげなさい。

⑦㉒ まさおさんが てつだって くれたので、たすかったわ。

⑦⑩ まさおが てつだって くれたので、はやく おわったよ。

(2)② あら、まさおさん、しばらく。

⑦㉓ まさおくん、ことしも、てつだって くれるかい。

⑦㉔ まさお、ことしも、おもちつきを てつだって あげるんでしょう。

⑦⑭ はい、まさおさん。

ました(1)

⑨7 おとうさん、おちやが はいりましたよ。

ます(5)

②9, ③2, ③9, ④1, ⑤3

まつ〔待つ〕(1)

④7 まって いるわ。

まで(2)

③1 しょうがつは、いつまで こっちに いられるんだい。

③2 いつかまで います。

むかえる〔迎える〕(1)

⑬ ちちが むかえに きて くれるの。

も(6)

⑩ まさおさんも？

⑪7 まさおくんも この れっしゃだったのか。

②4 さっ、まさおくんも どうぞ。

③7 まさおくん、ことしも、てつだって くれるかい。

⑤2 まさお、ことしも、おもちつきを てつだって あげるんでしょう。

⑦0 あっ、あきおにも もって きて やりなさい。

もうすぐ(1)

⑨6 ああ、もうすぐ おわりだ。

もちつき(2)

③5 おとうさん、あした、おもちつきでしょう。

⑤2 まさお、ことしも、おもちつきを てつだって あげるんでしょう。

もつ〔持つ〕(6)

(1)⑤ もって あげるよ。

(2)②1 そこで あって、にもつを もって もらったの。

(3)⑥8 けいこ、まさおくんに てぬぐいを もって きて あげなさい。

⑦0 あっ、あきおにも もって きて やりなさい。

(4)⑦⑧ あきお、それを もって いて やるよ。

(5)⑥ じゃあ、その にもつ、わたしが もつわ。

もらう(2)

②① そこで あって、にもつを もって もらったの。

⑤⑦ けいこさんの おとうさんに くるまで おくって もらったよ。

やくそく〔約束〕(1)

⑥③ あ、やくそくしたよ。

やる(2)

(1)⑦⑩ あっ、あきおにも もって きて やりなさい。

(2)⑦⑧ あきお、それを もって いて やるよ。

ゆっくり(1)

②④ ゆっくり できて いいね。

よ(8)

⑤ もって あげるよ。

④⑩ ことしは、くじごろからに しようよ。

⑤⑦ けいこさんの おとうさんに くるまで おくって もらったよ。

⑥③ あ、やくそくしたよ。

⑦⑧ あきお、それを もって いて やるよ。

⑧⑩ これで おわりだよ。

⑨⑦ おとうさん、おちやが はいりましたよ。

⑩⑩ まさおが てつだって くれたので、はやく おわったよ。

よいしょっと(1)

⑦③ よいしょっと。

れる(られる)(1)

⑧① しょうがつは、いつまで こっちに いられるんだい。

れっしゃ〔列車〕(1)

①⑦ まさおくんも この れっしゃだったのか。

わ(6)

(1)⑥ じゃあ、その にもつ、わたしが もつわ。

⑭ あっ、きたわ。

④⑦ まって いるわ。

②④ まさおさんが てつだって くれたので、たすかったわ。

③⑥ けいこ、かわって あげるわ。

(2)⑥① それは、よかったわね。

わたし(2)

⑥ じゃあ、その にもつ、わたしが もつわ。

③② こんどは、わたしが かわろう。

を(6)

②① そこで あって、にもつを もって もらったの。

③② まさお、ことしも、おもちつきを てつだって あげるんでしょう。

③③ けいこ、まさおくん に てぬぐいを もって きて あげなさい。

⑦⑧ あきお、それを もって いて やるよ。

③③ その ひもを とって くれ。

③⑤ ここを おさえて くないか。

ん(3)

(1)②⑦ いいんですか。

③② まさお、ことしも、おもちつきを てつだって あげるんでしょう。

(2)⑥① しょうがつは、いつまで こっちに いられるんだい。

資料2. シナリオ全文

題 名 日本語教育映画
「にもつを もって もらいました」
——やり・もらいの表現 2——

企 画 国立国語研究所
制 作 日本シネセル株式会社
フィルム 16m/m E K カラー・スタンダード
巻 数 全 1 巻
上映時間 5 分
現 像 所 東映化学
録 音 読売スタジオ
完 成 昭和58年 3 月30日

制作スタッフ

制 作	静 永 純 一	制作担当	佐 藤 吉 彦
脚 本	前 田 直 明	演 出	前 田 直 明
演出助手	野 澤 和 之	撮 影	相 良 国 康
撮影助手	{加藤 藤 正 義 晶	照 明	伴 野 功
照明助手	{中安 村 和 則 雄	スクリプト	成 田 由 紀 子
録 音	小 川 正 城 (読売スタジオ)		
ネガ編集	亀 井 正		
配 役	正 男 逢 坂 秀 実 恵 子 下 川 久美子		
	正男の父 内 田 稔 正男の母 福 田 公 子		
	恵子の父 吉 永 慶 恵子の母 武 田 定 子		
	恵子の弟 吾 妻 光 弘		
	明 夫		

カット	画 面	セ リ フ
1	メイン・タイトル 「日本語教育映画」 テーマ・タイトル 「にもつを もって もらいました」 —やり・もらいの表現 2—	
2	雪国の駅・ホーム 1 列車を降りる正男 列車が通り過ぎると雪景色 2 階段付近で恵子に近づく正男 恵子の荷物をもつ 階段を登りはじめる二人	正男「①けいこさん。」 恵子「②あら、まさおさん、 しばらく。」 正男「③しばらくだね。 ④それ、おもそうだね。 ⑤もって あげるよ。」 恵子「⑥じゃあ、そのにもつ、 わたしが もつわ。」 正男「⑦うん。 ⑧げんきだった？」 恵子「⑨ええ。 ⑩まさおさんも？」 正男「⑪うん。」
3	駅前 1 改札口を出る正男と恵子 2 車が来る 3 車が止まり、父と会う恵子	正男「⑫けいこさん、バスで かえるの？」 恵子「⑬ちちが むかえにき て くれるの。」 恵子「⑭あっ、きたわ。」 恵子「⑮おとうさん。」 父「⑯おお。 ⑰まさおくんも この れっしやだったのか。」 正男「⑱ええ。 ⑲おひさしぶりです。」

4 父、荷物をトランクへ運ぶ

5 恵子と正男車に乗る

6 車走り出す
雪道・走る車の中

1 父

2 正男

3 父

4 恵子

5 正男

6 父

7 正男

父「20しばらくだね。」

恵子「21そこで あって、に
もつを もって
もちったの。」

父「22それは、どうも。」

正男「23じゃ。」

父「24さっ、まさおくんもど
うぞ。」

正男「25えっ。」

父「26おくって あげよう。」

正男「27いいんですか。」

父「28どうぞ。」

正男「29それじゃあ、のせて
いただきます。

30じゃ。」

父「31しょうがつは、いつま
で こっちに いられ
るんだい。」

正男「32いつ かまで いま
す。」

父「33あ、そう。

34ゆっくり できて い
いね。」

恵子「35おとうさん、あした、
おもちつきでしょう。」

父「36ああ。

父「37まさおくん、ことしも、
てつだって くれるか
い。」

正男「38ええ。

39なんじから はじめ
ますか。」

父「40ことしは、くじごろか
らに しょうよ。」

正男「41じゃあ、くじ すこ

5

正男の家の前

1 車が止まり、正男が降りる

しまえにいきます。」

正男「④②おくって いただき
て、ありがとうございます
ました。」

父「④③いや、いや。

④④あした、くじに き
て くれるね。」

正男「④⑤はい。

④⑥じゃ、あしたの あ
さ。」

恵子「④⑦まって いるわ。」

正男「④⑧うん。

④⑨じゃ。」

恵子「④⑩さようなら。」

6

正男の家

1 玄関の戸を開ける正男

母がやってくる

二人居間へ入る

正男「⑤①ただいま。」

母「⑤②ああ、おかえり。

⑤③そとは、さむいでし
ょう。」

正男「⑤④ううん。」

2 居間のコタツにはいる正男

と母

正男「⑤⑤えきで けいこさん
にあってね。」

母「⑤⑥あら、そう。」

正男「⑤⑦けいこさんの おと
うさんに くるまで お
くって もらったよ。」

3 お茶をいれる母

母「⑤⑧そう。

⑤⑨おくって くださっ
たの。」

正男「⑤⑩うん。」

母「⑤⑪それは、よかったわね。

⑤⑫まさお、ことしも、
おもちつきを てつだ
って あげるんでしょ
う。」

4 正男

おみやげを母に渡す

お茶をだす母

翌朝・恵子の家

1 もちつきをする恵子と正男

恵子と正男のペア

2 もちをのす母

恵子、ついたもちを運ぶ

3 明夫セイロを持ってくる

4 恵子手ぬぐいを正男と明夫に渡す

セイロを持っていく明夫

もちをこね始める正男

5 もちつきを代わる父

正男「⑥③ あ、やくそくしたよ。」

正男「⑥④ はい、おみやげ。」

母「⑥⑤ ありがとう。」

⑥⑥ はい、おちゃ。」

恵子・正男(かけごえ)

「(と) はい。(それ)

はい、(よいしょ)はい。

よいしょっと。」

正男「⑥⑦ あー、あつい。」

父「⑥⑧ けいこ、まさおくんにてぬぐいをもってきてあげなさい。」

恵子「⑥⑨ はい。」

父「⑦① あっ、あきおにももってきてやりなさい。」

恵子「⑦② はい、どうぞ。」

母「⑦③ はい、どうも。」

⑦④ よいしょっと。」

恵子「⑦⑤ はい、まさおさん。」

正男「⑦⑥ あっ。」

恵子「⑦⑦ はい、あきお。」

明夫「⑦⑧ はい。」

父「⑦⑨ あきお、それをもってきてやるよ。」

明夫「⑦⑩ うん。」

⑦⑪ これで おわりだよ。」

正男「⑦⑫ それ。」

父「⑦⑬ こんどは、わたしがかわろう。」

正男「⑦⑭ じゃ、おねがいします。」

母「⑦⑮ まさおさんが てつだって くれたので、たすかったわ。」

	母も恵子とかわる	正男「㉕いいえ。」 母「㉔けいこ、かわってあげるわ。」 恵子「㉗そう。 ㉘じゃあ。」 母・父（かけごえ） 「はい、（ほっ）はい、 （はい）はい。」
8	6 もちつき 正男の家 1 正男と母、買物から帰ってくる 2 雪囲いをなおす父 3 正男 4 父 5 玄関から出てくる正男 ひもをとる 6 雪囲いをなおす父と正男 7 " 8 玄関から顔を出す母 9 父 10 玄関に入る父と正男 お茶を入れる母	母「㉚ただいま。」 父「㉙ああ、おかえり。」 正男「㉛てつだおうか。」 父「㉜ああ。」 父「㉝そこの ひもとつて くれ。」 正男「㉞うん。」 父「㉟ここを おさえてくれないか。」 正男「㊱ああ。」 母「㊲おとうさん、おちやがはいりましたよ。」 父「㊳ああ、もうすぐ おわりだ。」 父「㊴あーあ。」 母「㊵さむかったでしょう。」 父「㊶まさおが てつだってくれたので、はやくおわったよ。」 母「㊷これで、おおゆきがふっても だいじょうぶね。 ㊸ごくろうさま。」
9	雪国の風景 1 その一（雪囲い） 2 その二（景色）	

10	企画・制作タイトル 企画・国立国語研究所 制作・日本シネセル株式会 社	
----	--	--

日本語教育映画解説27

にもつを もって もらいました
—やり・もらいの表現2—

昭和62年12月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘 3—9—14

電話 03 (900) 3111 (代表)

印刷所 文唱堂印刷株式会社

電話 03 (851) 0111 (代表)